
最強彼女

草薙若葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

最強彼女

【Nコード】

N3164K

【作者名】

草薙若葉

【あらすじ】

平凡でなんにも取り柄がない地味な僕の彼女は、学校一の美女。でもその彼女は、超がつくほどの二重人格で・・・。

アドバイス、感想、指摘をいただければとても嬉しいです。

弱い僕と強い彼女。

僕は、にしやまかずや西山和也。

中2。

7月7日生まれ。

蟹座。

A型。

見た目は、何処にでもいる中学生を思い浮かべてくれれば、84%の確率で僕（多分ね）。

性格は、ちょっと消極的。

学力は、中の下。

帰宅部。

好きなものは、ハンバーグで、

嫌いなものは、特に無し。

みんなには、カズって呼ばれてる。

（僕の紹介はココで終わろう。）

そんな僕には、彼女がいる。

ほら、あそこで男子と話してる女の子。

あれが、かるやまだみか 軽山田美夏。

同じ中2

8月15日生まれ。

獅子座。

B型。

見た目は、めっちゃ可愛い。多分、学校一。アイドル顔負け。

性格を語るには、多分、一時間は要する。

まあ、はしょって言うと二重人格。

学校では、温厚篤実、傾国美女、才色兼備とでも言いましょうか。
とにかく可憐。

でも、僕の前では『最強彼女』。

蹴る、殴る、そして十字固めまで使ってくる。

でも、周りの人に言っても信じてくれない。

だって、いつもはすごいブリッコしてるから。

それに気づかないのは、男子ばかりでなく女子もだ。

みんな、彼女が二重人格なんて夢にもみてないみたいだ。

その上、賢いから先生からも信用されてる。

成績は、上の上（オール5）。

これも多分、学校一。

華道部、書道部、調理部の三又。

そして、クラス委員をしている上に、生徒会長。

本人曰く、すべて信用されるためだそうだ（そこまでやるか・・・？フツー）。

趣味は、表向きは、読書に華道に書道にお菓子作り。

裏は、柔道に空手にラグビー、そしてボクシング&プロレス観戦（これは誰にも内緒）。

家は、お母さんがどっかの会社の秘書。お父さんは、某大手会社の社長さんだ。

（家に行ったときマジビビった。）

僕が知っているのは、これくらい。

ついでに言っとくけど、僕と彼女が付き合ってるのも内緒だ。

だって、そんなこと知られたら、彼女のファンクラブの部員に殺されるからね。

雨の日の出逢い。

出逢ったのは、今から4ヶ月前の6月だ。

その日は学校帰りに突然、大雨が降って、僕は仕方なく近くの建物に、雨やどりしていた。

だが、厚い雲は去る気配もなく、果てしなくどこまでも、広がっている。

雨は、いつまでたっても降り止まない。

雨の日は嫌いなんだ。

良い事なんてあったことがない。

天気予報は外れるし・・・傘を持っていくのは忘れるし。

僕は、憂鬱と苛立ちを胸に抱えて、雨が降り止むのを、ただ待つ。

「あれ？西山・・・君？」

女の子のきれいで澄んだ声がした。

顔をあげる。

そこには、軽山田美夏の顔があつた。

あいも変わらず、今日もきれいだ。

「雨やどり？」

「う、うん」

僕は、一度も話したことがないので、戸惑いながら頷く。

軽山田さんは、いつも友だちに囲まれている。

その点、僕は一人、はやく休み時間が終われと願いながら、机に顔を伏せるているだけだ。

こんなカタチで、喋ることになるとは・・・。

「傘、いる？」

軽山田さんは、少し微笑みながら、鞆から水色の傘出した。

僕は、コクンときこちなく頷く。

胸がドキンドキンと高鳴り、今にも破裂しそうだ。

「どうぞ」

「あ、あり・・・が・・・と・・・」

僕は、必死に言葉を紡ぎながら、傘を受け取った。

「そんなに、緊張しなくっていいよ」

彼女は、あははっと可愛らしく笑った。

「あれ？やんだ？」

彼女は、瞬きして、空を見上げる。

空は、いつの間にか、青く澄み渡っていて、虹が架かっていた。

「うわ！見て見て！きれー」

彼女が、虹色の橋を指す。

このあと、衝撃的な事実を知ることになるとは、思いもしなかった。

暴力的な彼女と可憐な彼女。

「西山君・・・ってさ」

彼女が、口を開いた。

僕らは今、帰り道の途中だ。

しらなかったのだが、帰り道が同じらしい。

「?」

「一人で居るの・・・好きなの?」

「え?う、ううん!別に好きなわけじゃない・・・ですよ?」

好きなわけではない。

休み時間が一番つらい。

ひとりぼっちで、友だちという友だちも居なくって・・・。

ほしいうっていても、もうグループは完全に来ちゃって、入るに入れないし。

大体、僕は自分から人に話しかけるタイプじゃないし・・・。

だから、あきらめてるけど、心の奥深くのどこかで『誰かが話しに来てくれはず』って思ってるんだ。

だから、机に伏せて待つてゐるんだ。

「あははっ、何で敬語?!」

彼女がかわいらしく笑う。

「いや・・・まあ・・・」

特に理由はなかったのだが・・・。

「ねえ、彼女お」

どこからか甘ったるいにおいととも男の声が聞こえた。

声がした方向を見る。

そこには、金色に染めたきらびやか(?)な髪、鼻ピアス、剃ってなくなっている眉毛、

まあ・・・チャラ男って言うたら

分かってもらえるだろう。

チャラ男がはなしかけてきた。

うざったいほどの甘ったるい声で。

ナンパか？

まあ、彼女程きれいだったらされるわな。

「なんですか」

さ、さすが、ナンパされなれてる？！

「そんな冴えない男と歩いてねえで、俺と歩かねえ？ いろんなところ、つれってあげるからよお」

冴えない男で、悪かったな（怒）

「結構です」

れ、冷静だな。

戸惑いもせず、彼女は凜と立ち、冷静で、僕は彼女を美しいと思った。

いや、顔も美しいんだけどさ、なんていうんだろ・・・まあ、直感かな（笑）。

「そーいわずにさあ」

チャラ男が、しつこく誘う。

「行こう、カズ」

え？ カズ？！

そう思うのもつかの間、僕は彼女に腕を引っばられた。

ずんずんと大股で進んでく彼女。

「ちよ、まてよお。人の話聞こーよ」

人の話聞いてねえのはてめえだよ、チャラ男。

チャラ男が、ポンと彼女の肩をつかんだ。

「・・・めろ」

どこからか、低い声がした。

まるで、地獄から這い上がって来たような・・・ぞくつとする声だ。

「へ？」

「やめろつつつてるやろっ！！！」

彼女は、チャラ男の腹を蹴った。

ナイス！彼女。

・・・じゃなくて。

ええ????!!!!

あの軽山田さんが!?

ってか、関西弁!?

チャラ男も、うずくまり腹を抱え、あり得ないという風に、立っている彼女を見上げた。

「うつといんじゃない、ウチをナンパしようなんて、百年はやいわ!!」

彼女が、うずくまってるチャラ男の背中を勢いよく踏んづけた。

うめくチャラ男。

最終的には、「すみません!すみません!もうしませんから・・・!!!!!!!」

と土下座して謝る始末。

・・・なんか、チャラ男がかわいそうになって来たよ・・・。

「ホンマやな?」

「はいいい」

彼女が、やっと蹴るのをやめた。

チャラ男が、すたこらさつさと逃げて行く。

あばよ・・・チャラ男・・・。

「ばーか」

彼女が僕の方を向く。

そして、目を剥いた。

顔色がどんどん青くなっていく。

気づいてなかったんだ・・・僕の事。

「あはは・・・」

笑うしかなかった。

「このことは、ぜえったい・・・内緒やで」

うなずく僕。

「ばらしたらどうなるかわかってるやろなあ？」

僕は何も言わず、何回もうなずくしかなかった。

だってうなずかなかったら殺されそうだよ・・・。

ここに僕の立場になってたって見たら分かると思う。

いきた心地しないよ？

僕と彼女の関係。

「最近、お前美夏ちゃんと仲良くな？」

小学生の頃、友だちだった（しかも高校に入るまでずっと一緒のクラスだった）みかやまけいたろう 甕山慶太郎が
数年ぶりに話しかけてきた。

慶太郎は、一言でいえば人懐っこくて可愛い。

例えると、そう・・・まるで、犬みたいだ。

誰にでも、愛想を振りまく。

だが、高校に入るとクラスが違ったせい、友達が多くなったせい、
か、

もっとほかの理由があったせい、

分からないけど、一言も言葉を交わしていない。

あ、でも一回あった。

中二の時の給食時間。

「コロッケ、俺にくれ」

「い、いいよ、あげる・・・」

本当は食べたかったのに、あげたことを、そのあとすごい後悔した。ついでに、言つとくが、慶太郎は『彼女』のファンクラブの部長である。

彼女の素顔が、ああだと知ったら失神するくらい驚くのだろうか？

僕は、少し思った。

「い、いやそんなことないよ」

「そんなこと、あるだろ。俺、知ってんだからな。昼休み、美夏ちゃんと話してること」

「いや、話してたっていうか・・・脅され・・・」

そう、毎日毎日『あのこと』を言っていないか確かめられるのだ（拷問に近いやり方で）。

「？」

僕は、あわてて手で口をふさいだ。

彼女が、こっちを睨んでいるのが、わかったからだ（地獄耳か？）。

「どーした」

慶太郎が、訝^{いぶか}しげに僕を見る。

「ううん、なんでも」

「とにかく!!」

慶太郎が、僕の机をバンツと叩いた。

その音で、周りの視線が集まる。

「今後もそういう、行動がみられるなら学年中でお前をハブることだって、俺には簡単にできるんだからな!」

僕は、いつもと違う慶太郎にビクつきながらうなづく。

「よしっ」

慶太郎は満足したらしく、いつもの笑みで自分の組へ帰って行った。つていうか、今日の件について昼休みに、こっそりと彼女にしばらくのことだろう。

それは、みんなにハブられるより、僕にとっては怖いことだった（いつも、ひとりぼっちだし）。

彼女の嘔泣き。

「痛い痛い！！」

僕は今、屋上にいる。

そして、こともあるうか十字固めまでされてる。

だんだん、ひどくなってる気がする。

一日目（あの事件から数えて）は、けられながら質問されて、

二日目は、雑巾しぼり（手を雑巾みたいに絞られること）

三日目は、雨が降ってる中、盆踊りで

四日目は、（三日目で『踊り』にハマったのか）ドジョウすくい

そして今日に至る。

思い返してみれば、ホント理不尽だな、僕。

でも十字固めって・・・。

そのうち、背負い投げされたり、関節外されたりするんじゃないか
心配になってきたよ・・・。

ガチャッ

扉があく音がした。

「な、なにしてんだよっ！」

聞いたことのある声。

た、たすけてくれ・・・。

そして、暴行罪で訴えてくれ・・・！！

ホント死ぬってば！

「カズ！お前、美夏ちゃんに・・・！！」

え？！僕かよ？！

訴えられるの僕？！

でも、はたからみれば技をかけているのがこいつだってわかるはず・
・なんだが、

慶太郎は、違うつり方をしてみたかった。

「お、おまえ、美夏ちゃんに変なことしただろっ！」

してねえよ！！！！

っていうか、するか！！

そんなことしたら殺されるっつの！

慶太郎が、わなわなと唇を震わせる。

「ち、ちが」

僕が反論するが、慶太郎は聞く耳をもたない。

「よ・・・かった」

彼女は、あたかも僕に変なことをされて怖かったかのように肩を震わせて泣いた。

慶太郎は、彼女の小さな肩をさりげなく抱いた。

おい、慶太郎。

鼻の下、のびてんぞ。

「こんなことされて・・・髪の毛もぼさぼさじゃないか・・・かわいそうに」

それは、僕に十字固めをしたからです。

「おまえな！こんなこととして許されると思うな！！！！暴行罪で訴えてやる！！」

僕への疑い、慶太郎との絶交。

慶太郎は、僕が彼女を押し倒して、彼女が嫌がって十字固めをした
と思っているらしい。

押し倒されたんなら、突きはなしたり、もがいたりはしても、十字
固めはせんだろ・・・。

「ち、ちがうんだよ」

「なにがっ」

「僕はなんにもしてないってばっ」

「嘘つけ！」

慶太郎・・・お前ホント僕のこと信用してないな・・・。

「けいたろ・・・くん」

彼女が弱々しく口を開いた。

今度は何を言うつもりだ・・・？

「西山くんは悪くないの・・・訴えないであげて」

僕は内心びっくりした。

彼女が、僕をかばってくれるなんて思いもしなかったんだ。

まあ、彼女がまねいた事なんだけれども・・・。

不覚なことに、胸が熱くなつた。

「私が・・・」

彼女の目からまたほろりと雫が落ちた。

それは、とても嘘泣きと思えないくらい・・・。

「美夏ちゃん・・・こんな男のことで泣いてやるな!」

こんな男つて・・・。

僕なんにもしてねえのに・・・。

「カズ・・・」

僕は、慶太郎の目を何故か真つ直ぐに見れずうつむいた。

これじゃ、僕が本当にやつたみたいじゃん・・・。

「今日から、もう絶交だ!!!」

「・・・」

僕がやつたんじゃねえのに・・・。

彼女の看病。

おそろおそろ、教室に入った僕は、思わず胸を撫で下ろした。

そこには、いつも通りの風景がひろがっていた。

だが、どこか、わびしい感じがする。

なにか、物足りない気がするのだ。

クラスメイトの声がした。

「美夏ちゃん、どうしたんだろ」

「風邪だっ てきいたけど」

「マジで？大丈夫かなあ」

風邪？！

あいつが？！

昨日まで元気だったのに。

看病に行こうかな・・・。

いや、いや。

僕は慌てて首をふった。

何で僕がつ!!

ってか、僕そんな答えに至るんだ?!

あいつなんか・・・。

僕は、あいつの悪行を思い出してみた。

それは数えきれないほどあった。

「カズ!」

僕は慌てて、前を見た。

そこには、慶太郎が仁王立ちしていた。

「なに?」

「お前、美夏ちゃんの看病に行くなよ!!」

「い、いかねえよ!!んなの」

「いや、しんじらんねえな。だってお前美夏ちゃんの事好きだろ?」

「なっ!!!?」

「やっぱりなあ、そうだと思ったよ」

慶太郎が鼻をフフンと鳴らした。

「ちがつー!!」

「ま、覚悟しとけ」

違っつてば、何で僕がアイツのこと・・・。

彼女に貸したDVD。

今、僕は自分の部屋にこもってる。

そして、あることに気づいた。

「あ、あいつにレンタルDVD返してもらわなきゃ」

そう、彼女に貸したのだ、DVDを。

え？DVDの内容？

めっちゃ、どろどろしたサスペンスドラマのDVD。（彼女いわく、なんかどろどろ感が好きらしい）

いや、いや。僕がTSUTAYAに借りたんじゃないよっ？！

母さんのだからっ！！！！

実は、こっそり見てるとかはないからねっ？？？！！！！

今日締め切りなんだから、返してもらわなきゃ母さんに殺される。

彼女の家に行かなきゃっ！！！！

僕は、立ち上がった。

あ、そうだ。

僕、彼女の家知らないじゃん。

ってか、彼女風邪引いてるじゃん。

．．．．．殺されるじゃん。

やばくね？

僕、死ぬんじゃない？

彼女の家は白亜の豪邸。

「なんじゃこりゃあああ」

僕は、彼女の家の前に立っている。

目の前に広がるのは、視界に入りきれない程の豪邸。

僕は、開いた口が塞がらない。

これがあいつの家?!!

ありえねえ!!

僕は、彼女の家を知ってる人に書いてもらった紙に目を落とす。

間違いない、この家だ。

でも納得いく気もする。

あの、（皆でいるときの）品の良さ、立ち居振る舞い。

あれだけ強いのも、自分を護るために、誰かから習ったのだろう。

「あの・・・」

振り向くと、白いヒゲを生やした初老の男が立っていた。

「どちら様で？」

「あ、えっと、西山和也です」

「ああ、和也君だね！美夏お嬢様から、お聞きしておりますよ」

「はあ・・・」

「お嬢様の、初めて出来た友だちだって、いつも・・・」

初めて出来た友だち・・・？

彼女には、たくさん友だちがいるのに・・・？

「じい！！」

声がした方を見る。

そこには、ネグリジエを着た彼女が居た。

「何してらっしゃいますか！！寝て居なさいとあれほど・・・」

「暇だから散歩しようと思ったの！いいでしょ、そんなくらい」

「いけませんよ！まだ寝てて下さい！」

「やだよ」

僕はある事に気づいた。

『じい』の前では、ブリッコしてない。

家では、しないのかな。

まあ、そうだよな。

したら疲れるもんな。

「それと、じい」

「はい、なんでございましょうか」

「余計な事いわなくていいから！」

「・・・かしこまりました」

彼女が、僕の方に向いた。

「カズ、お見舞いに来たの？心配してくれたんだ？」

彼女が、にんまり笑う。

「ちげえええよ！！」

彼女の家は白亜の豪邸。
(後書き)

T S U T A Y Aでの出逢い。

「はぁ・・・・・・・・・・」

帰り道、僕はうつむいた。

つかれた・・・。

精神的にも肉体的にも・・・。

あれから、なんとかDVDを返してもらって、（まだ、見ていたら
しい）彼女のためにストレス発散機

（サンドバック）になって・・・。

思い出ただけで疲れる・・・。

僕は、T S U T A Y AへDVDを返しに行った。

返し終わって、帰ろうとする。

あ、またお母さんに借りてこいっていわれたんだった。

僕は、思い出してずらりとDVDが並んでいる棚を見上げた。

確か、次は恋愛ものの映画だったはず。

あった。

棚に手を伸ばしてとる。

恋愛もののDVDを借りるのは少し恥ずかしいが……。

借りようとカウンターまで行ってDVDを置いた。

「いらっしゃ……あれ？」

「？」

早くしてくれよ、レジ（のお姉さん）……。

おなか空いたんだよ。

彼女のせいであいつで！

「もしかして、あなた……西山くん？」

TSUTAYAでの出逢い。(後書き)

どうも!!

普段あとがきを書かない私が何故書いたのか・・・
気になりますか？

え？ならない？

・・・(無視)
なぜなら!!

最強彼女のオリジナルキャラクターを作って欲しいのです！
よっぽどひどくなければ物語に出てくるはずです・・・たぶんね、
保証はしません。

ということ、絵とかつけてくれたら嬉しいですけど、名前&設定
でいいので(あと、主人公、美夏との関係などなど)
お願いします。

あ、いい忘れましたがメッセージで送って下さい。
それでは。

アルバイト禁止。

「山ノ内・・・さん？」

「そーだよー！」

山ノ内さんは、嬉しそうに笑った。

レジの人は クラスメイトの山ノ内翔子だったのだ。

山ノ内は、あいつの二番目にモテてる・・・らしい。

放課後の教室で誰かが（男子）話しているのを聞いたことがある。

でも・・・

「うちの学校、アルバイト禁止じゃなかったっけ？」

「・・・・・・まあ」

山ノ内さんは、気まずそうに目をそらした。

「内緒にして？お願い！！」

「いいけど・・・」

後ろを振り向く。

「後ろ並んでるから早くしてくれるかな」

「あ、いめん、いめん」

誰かプリーズヘルプミィ。

「おっはよ〜」

教室に入って、まず声をかけて来たのが、彼女だった。

変わらない日常。

「ああ、おはよ」

「西山く〜ん」

ゲツ。

甘い声とともに、あいつが僕の体に後ろから飛びつく。

そう、山ノ内翔子。

「昨日は楽しかったね。またきてね」

山ノ内さんが、満面の笑みで（後ろにいるからみえないけど）笑ったような気がした。

彼女の頬がぴくっと引きつるのが分かった。

彼女が切れたときのサインだ。

ヤバイ！！

そう思った瞬間、彼女は鬼の形相になっていた。

「西山あああああつあああああ」

僕がよっ！！

山ノ内さんじゃねえのかよっ！！

山ノ内さんは、身の危険を感じたのか、ずっと僕からはなれた。

僕を見捨てるなあああ！！

逃げようとしたが、彼女に二の腕をつかまれる。

「てめえええええ、昨日あいつと何したんだあああああ」

「何にもしてないってばあっ」

「嘘つけええ」

辺りは、しんとなって彼女と僕だけを凝視していた。

「嘘じゃねえええええってば」

「しらじらしいっ、こうしてやるわっ」

しらじらしいも何もあるかっ！

何もしてねえんだから！

僕は、後ろから首を絞められる。

く、くるしい！

必死にもがくが、彼女の手は決して離れる事はない。

僕は目を白黒させた。

っていうか、これ殺人じゃねえ？

どんどん強くなって行く首を絞める力。

がらと、扉の開く音がした。

先生が入ってくる。

先生は僕たちを見て、目を見開く。

そして、ずっと青ざめた。

h , h e l p m e (た、助けて . . .)

僕は、目の前が真っ暗になった。

これ死んだんじゃない？

この物語もう終わりなのか . . . ?

僕 . . . 死ぬのか . . . ?

ここは冥土?! 先生は天使?!

ゆっくり目を開ける。

僕はベッドに寝かされていた。

消毒液のキツイにおいが、鼻を霞める。

白い天井・・・

――ここは・・・?

起き上がってみる。

首がじんじん痛んだ。

その痛みで、記憶がよみがえる。

―彼女に首を絞められたんだっただ・・・。

どうやら、ここは保健室のようだ。

よかった・・・と思わせてもしかして、ここ冥土だったりして・・・
なんてね。

「おきた〜?」

今まで何かを書いていた保健の宮部智美先生が振り向く。

「おきまし・・・って先生！？そのカツコ・・・」

なんと、先生は天使の格好をしていたのだ、白衣じゃなくて。

「これ？これねー」

「もしかして先生天使なんですか？！！」

「は？」

先生がぽかんと口を開ける。

先生の頭の上で揺れる輪っか（？）。

「僕死んだんすか？！」

「えつとね・・・」

先生（天使）は、言いにくそうに目を伏せてこぶしを額に当てた。

やっぱり！

僕殺されたんだ？！！

「ここ、どこなんすか？！天国？地獄？」

僕が先生にすがりつく。

「えつと、ちがうのよ」

「へ？」

今度は、僕がぽかんと口を開けた。

「これコスプレなのよね」

「コスプレ！？」

「潤ちゃ・・・田山先生にもらって・・・ね、試着してたところなのよ。そこに西山君が起きたってこと」

田山先生とは、うちのクラスの担任ー田山潤ーである。

あの真面目で硬派な田山先生が！？

そう、田山先生の授業中、しゃべったら実験のモルモットにされるっていうくらいの噂が流れているくらい。（オーバーすぎだろ）

笑顔なんか見た事がない。

だが、そんな先生のファンは多い。

そして、宮部先生も結構モテる。

先生目当てに休み時間、保健室に来る男子がいるっていつくらい。

女子にもトモちゃんって呼ばれて親しまれている。

そんな先生がコスプレ？！

つてか、田山先生が一番ありえねえ！！

そんな事を思っていると、扉が音を立てて開いた。

「トツモちゃん」

「潤ちゃん」

二人は、僕の前で抱き合いやがった。

バカップルか？

僕は、心の中で毒づいていると、田山先生が僕に気づいた。（今頃？！僕ってそんなに存在薄い？！）

「に、に、に、に、に、西山？！」

『に』が五つ多いよ・・・先生・・・・・・はあ。

僕の両親は・・・。

「ええーっと、これはだな・・・深い理由^{わけ}があつてだな・・・」

深い理由つてなんだよ。

「先生・・・いいです。説明は」

「いや、でも誤解なんだぞ?!」

「大丈夫ですから、誤解してませんって」

先生は空咳して、メガネをかけ直した。

「とりあえず、保護者に連絡して・・・」

「先生」

宮部先生が、田山先生の声を遮る。

「なんですか、宮部先生」

「何度電話しても、つながらないんですよ」

それもそのはず、うちの親は二人揃って秋葉原に行っているのだから・・・。

そう、秋葉原っていったら、オタクの聖地。

うちの親も、オタクなのだ。（二次元の方の）

家中には、フィギュアで埋め尽くされている。

そんな中でこんな平凡な僕が育ったのは奇跡だと思う。

余談だが、めっちゃラブラブなのだ。

さっきまでの田山先生と宮部先生みたいに。

二人がつながっているのは、赤い糸じゃなくて、オタクの絆^{いと}じゃないかっておもうほど。

日が暮れたら早く帰りましょう。

「えっと、今日は両親帰ってこないの一人で帰ります」

「大丈夫なの？」

「はい」

「それなら仕方ないな、ほら」

先生が、僕の鞆を渡した。

「早く帰りなさい、日が暮れたら危ないからね」

はい、絶対そんなこと思ってない。

だって、僕八時まで居残りさせられたことがあるもんね！

宮部先生と、イチヤイチヤしたいだけでなくせに。

まあ、お邪魔虫は退散するでしょう。

「じゃあ、さよならっす」

お幸せに。

「ああ」

「バイバイ」

宮部先生の手とともに、頭の上の輪っかが揺れた。

治療費の代わりに?!!

昇降口で靴を履いた。

空は、もう日が沈みかけていた。

校門へ向かう。

校門を通った時、

「カ・・・・・・・・ズ」

と、鬱々とした声が聞こえた。

全身の毛が逆立ってしまうような。

辺りを見回す。

なんと校門の陰に彼女が隠れていた。（かろうじて彼女と分かった）

いや・・・・彼女って言うてもいいのか・・・・？

貞子の様に、黒くて長い髪を前に垂らして。

あ・・・・もしかして。

「お前、僕を驚かそうとしてんだろ？そうはいくか!」

そういつて僕は、彼女にパンチする真似を試みる。

ああ、重症だ。こりゃ。

いつも通りのあいつが僕に「お前」っていわれて黙っているわけがない。

「おい、いきてるか？」

僕は、顔の前に（髪の毛で隠れているが）ひらひらと手を振ってみた。

「あんたこそ……」

弱々しい声が返ってくる。

「僕はこの通りぴんぴんだぞ？」

「びつくりしたじゃ……んか……」

彼女が、僕の腹にパンチした。（いつもより弱々しいが）

それより……

「もしかして……心配してくれてたの……？」

それはありえねえよなあ。

僕が彼女の顔を覗き込む。

「違うもん！自意識過剰過ぎ！」

ハイ、スミマセン。

「・・・でも死んじゃうかと思った・・・気絶するから・・・」

そりゃあ、普通の人には、あれだけされたら気絶せざるを得ないと思いますけど？

「まあな、僕も思ったよ、っていつか治療費ちょうだい」

冗談半分で言ってみる。

「バーカ」

バカってなんだよ？！

「まじいてえんだぞ？、この首の傷」

「じゃあ・・・」

彼女が、僕の制服の袖を引っ張る。

「・・・?!」

バランスが崩れて、よろめく僕。

そこに、彼女の唇が頬にあたった。（あたったよりかすったの方が正しいかな）

「なにすんだ・・・?!?!?!」

「治療費!!」

はぁ?!!!

っていうか僕のファーストキスがあああああああ（泣）

彼女は、少し顔を赤くして、走って家へ帰ってしまった。

僕は、赤くなるどころか青くなっていた。

ば、僕のファーストキス・・・もっとロマンティックなのを想像してた・・・のに。

イシャリヨウヲヨコセ・・・。

彼女の本当の性格。

まだ、彼女の唇の感触が残っているー！。

僕は、頬を触ってみた。

そして、ある疑問が浮びあがった。

ー彼女が僕の事が好きなのかー

・・・いや、ありえねえ、これだけは・・・！

ーでも、好きじゃないならなんでキスしたんだ？ー

考えても考えても、答えにたどり着けない。

むしろ、もっと分からなくなっ来ている気が・・・。

ーでも、もしー！もしだよ？・・・彼女が僕を好きとして・・・

僕は・・・彼女の事が好きか・・・？ー

いや、嫌いじゃない。

何か憎めない。

彼女が美人だからっていう問題じゃなくって・・・もっと違う問題で・・・。

それと、僕といるときだけに一瞬見せる哀しい顔を見ると、無理し

てるのかなって思う。

そりゃ、暴力的な所も彼女の一面なのかもしれないが、彼女は僕
思っているより、

ずっとずっと弱くて儚い人なのかなって思う。

そんな顔を見ると護ってあげなきゃなって思うのは思うんだけど・
・。

山ノ内翔子のファンクラブ。

教室に入ると、「おはよう！」と、とびきり甘い山ノ内さんの声が聞こえてくる。

それはいつもと変わらない。

でも・・・

「軽山田は？」

「あいつうー？知らない。登校拒否なんじゃない??」

「登校拒否?なんで?」

「ほらーダーリンが首締められたんじゃない??そのあと、皆にひかれて先生にも怒られて、教室でてっちゃったよー」

「そうか・・・そうだったな・・・」

「皆にばれたのか・・・」

「前までは、早くばれろって思ってたのに・・・」

「って、なにげにダーリンってよぶなああああああ」

「だって、ダーリンでしょ?」

「いつ、お前の彼氏になった!?!?!?」

「なつてないけどお、ダーリン私の事好きでしょ??私の事もハニ
ーと呼んでいいよお」

絶対呼ぶもんか!!

山ノ内は、髪の毛をいじりながら言う。

その発言に周りは、どよめいた。

「お前!翔子様の事を好きなのか?!!」

僕の元へすがりついて来たのは、山ノ内のファンクラブの部員であ
る。

「やめえええい」

教室中に響き渡る声を放ったのは、山ノ内のファンクラブ部長・南^み
藤^{なとうよしお}好男である。

彼は、ナルシストな事で有名だ。

「でも!本当の事を確かめ・・・いて」

南藤はハリセンで部員達を叩いた。

「翔子様がたとえ彼氏ができたとしても!!愛すと誓ったのを忘れ
たのかああああ!!」

「忘れてません!」

「よし！それでこそ僕さんの部下だ！！」

一人称僕たんって・・・。

っていうか熱^{あち}いな。

面倒くさそうだから、なるべく関わらない様にしておう・・・。

僕はそつと離れようと後ろを向いた。

「西山和也！！！！この僕たんが何度アピールしても振り向かなかつた翔子様が振り向いた

っていうことはお前に何かあるってことだ！！翔子様を大事にしたまえよおおおおおっおおお

声が震えている。

最終的には、号泣しやがった。

部員達もそれにつられて泣き出す。

ああ、なんでこんなのが同じクラスなんだ。

彼女の冷酷(?)な噂。

彼女は、昼休みに遅れて学校に来た。

いつもどおりの彼女。

髪の毛も、手入れされていて、さらさらだ。

目も腫れてはいなかった。

だが、泣いているように、寂しがっているように見えるのは、僕だけだろうか？

彼女は、席につき文庫本の表紙を開いた。

そんな彼女に、冷酷な噂がのしかかる。

半分本当のことだけれども、半分嘘が混じっていた。

噂っていうものは尾ひれがつくものだから。

例えば……そうだ。

こんなのがあったな。

ー彼女は、サイボーグである。

ありえねえよ！！！（っていうか、これ冷酷な噂じゃねえじゃん！）

バカなやつら
っていうか皆は、その噂を信じている。

でも、もしあいつに『私ってサイボーグなんだ』って言われたら信じてしまうかもしれない。

だって、めっちゃ強いから。

僕、死にかけたし。

って、話がどんどん変な方へ行ってる気がする。

とりあえず、話を戻そう。

・・・で、なに話してたっけ？

・・・忘れたな。

ま、いつか。

とりあえず彼女と話してみよう。

うん、そうしよう。

またチャラ男登場。

僕は、下校時間になってもまだ話しかけられないまま、彼女を追いかけていた。

なんかストーカーみたいだけど・・・。

だが、彼女は気付かない。

ずっと、うつむいたまま歩いている。

通りすがったチャラ男が彼女に声をかけた。（またチャラ男かよ！）

でも、今度はあの雨の日のチャラ男じゃない。

っていうか、なんであいつはチャラ男によく話しかけられるのだろう？

僕が、他の人に話しかけられるのを見てないだけかな？

まあ、そんなことはどうでもいいや。

ここから（電信柱の陰）では聞こえないので、代弁してみた。

『ねえねえ、彼女。どつかあそびにいこーよ』

彼女が、顔を上げて笑う。

『いいよ』

手を絡めあう二人。

・・・つておい!!

危ない人には、ついていかないってお母さんに習わなかったのかあ
ああ?!!

そんな僕の問いを知るはずもなく彼女とチャラ男は楽しそうに話している。

・・・なんかムカつく。

最終的には、二人で歩いてどこかへ行ってしまった。

僕は、呆然と立ち尽くすしかなかった。

彼女の『友だち』。

彼女はまた学校に来なかった。

どこで何をしているのか。

わからない……。

周りのクラスメイトは、いつもと変わらない。

あいつって、もしかして友だちいなかったのか？

クラスメイトとは、『友だち』ではなかったのか？

あんなに楽しそうに見えたのに？

あんなに笑っていて皆に頼りにされていたのに？

あいつが、あんな性格だって分かった瞬間、怖がり恐れ避けるのかよ?!

皆にとってあいつはどうでもいい存在なのかよ?!

沸々とわき上がる怒りという感情。

その感情は自分自身にも向けられていた。

言いたいことを、問いかけたことを皆にぶつちやけられない自分の事に腹が立つし情けない。

僕ってこんなに非力だったのか。

僕は机に突っ伏して齒ぎしりをした。

ああ！！むかつく！！

なんなんだよ……。

あいつは、チャラ男とどつかへ行ってしまっし……！！

……っていうかあの二人はいつたいどこへいったんだ？！

もしかして、ホテ……いや、ない！これはないよ……な？

彼女が許すはずがない……。

でも……でも！！彼女が望んでそれをするとしたら……？

いや、それはないよな……。

じゃあ、二人で心中？！

二人とも人生に疲れてて『じゃあ、自殺しよっか？』って流れになつたとしたら？！

いやいやいや……そんな『北海道に行こうか』みたいなノリはないよな！！

ない……よな？

安堵の息とこれからの不安。

教室がざわめいている。

なぜなら、僕たちのクラスに転校生が来たからだ。

僕は、それより彼女の事を考えていたので、三月の今頃に転校生が来るなんて珍しいくらいしか思っ
てなかった。

でも転校生の顔を見たたん、自分の目を疑った。

だって、そのチャラ男はこの前の彼女と一緒にいたチャラ男だったのだから、

「北山雅^{きたやまやび}や！よろしゅうな」

雅というチャラ男は、名前にふさわしくない程、チャラ男だった。

名は体を表すというけれどあれは嘘なのか？

まあ、そんな事はどうでもいいや

とにかく、心中はしてないみたいだし。

僕は、密かに安堵の息を漏らす。

「よろしゅうな！和也」

「うわぁえぁぁぁあ？！！」

僕はいきなり話しかけられて飛び上がった。

周りの視線が僕へと集まる。

ああ・・・もう。

「どうかしましたか？西山くん」

田山先生が訝しげに僕を見る。

「い、いえ、なんでもありません。すみません」

「そうですか。では、授業を始めましょう」

先生は黒板に向き直り、また文字を書き始めた。

・・・たく、チャラ男が隣の席だとは・・・。

早くクラス替えしねえかなあ。

新しい季節。

待ちに待ったクラス替え。

えっと・・・僕のクラスは・・・

・・・あつた。

3の3だ。

担任は、変わらず田山先生だ。

彼女はあいつ・・・

3の5。

はなれたのか。

嬉しいような哀しいような・・・。

まだ、彼女は学校に姿を見せない。

今日だって。

また行ってみようか、あの豪邸に。

「だありん」

また翔子か。

もう・・・。

翔子は相も変わらず後ろから抱きつく。

「和也、おはよーさん」

声をかけて来たのは、雅だった。

この頃、雅という事が多い。

席が隣だったのもあるし、こいつといたら面白い。

そして意外に話が合うからだ。

チャラ男だけど。

でも、彼女の事は聞き出せずにいる。

「はよー」

「きいてきいて！」

「なんだよ」

「あのね！わたしたち同じクラスなんだよ」

まじでか。

勘弁してくれ。

暴力地獄の次は抱きつき地獄かよ。

「もちろん、わいもな！」

「僕もさー！」

きやがった。

さっき、隊員といたはずだが。

いつも、ボウフラみたいにわいて出やがって……。

っていうかこいつも同じクラスかよ……。

先が思いやられるぜ……。

彼女のお父さん。

また、僕は彼女の家の前に立っている。

やっぱり、いつ見てもすごい豪邸だ。

「どうしたね？」

後ろから、男の声がした。

また執事さんか？

振り向くと、立派なひげを生やした執事ではない人が立っていた。

周りにはサングラスをかけた、ゴツイおじさんたちがいる。

僕は少しひるみながら尋ねた。

「えっと、美夏さんは・・・」

「美夏かね？」

呼び捨て？

もしかしてお父さんとか？！

「はい」

「美夏は・・・今ちょっとここには、いないんじゃない。すまないのう」

「いえ、あの・・・じゃ今どこに?」

「私の伯父のうちだ。いつてみるかね?」

「え?今・・・ですか?」

「いや、今じゃなくてもよいが・・・都合のつく時で」

彼女のお父さん(?)が名刺を僕に差し出す。

【軽山田武郎 株式会社 軽山田 社長 ××××××××××
|××××× 東京都 区××××××××××】

社長さん?!

っていうかやっぱりお父さんなのか。

伯父さんの家。

僕は今、彼女のお父さんの伯父さんの家にいる。

ややこしいけど。

っていうかなんだ！これ。

もっと、豪華だと思っていた彼女のお父さんの伯父さんの家は、庶民の僕さえも見た事ないボロい家だった。

こんなこといったら、怒られるけど。

っていうか本当に東京なのか！！？？これ！

なんと、伯父さん（＊うざったいのもう省略します）の家は、木で囲まれていた。

簡単にいうと山だ。

「うえええ」

吐きそう・・・。

そう、ここまで車で送^{ベシツ}ってもらったのは良いんだけど、山をのぼったから

揺れが激しすぎて、酔ってしまったのだ。

って、説明してる場合じゃない！！

マジ、吐きそう……。

僕は、右手で口を押さえて左手で（インターホンがないので）扉っぱいものをノックした。

「はあい」

出て来たのは、なんと元気そうな美夏だった。

全然、しんどそうじゃない。

「なにしてんだよっ」

「わっ！カズ！！」

彼女は、丸い目を更に丸くして驚いた。

「わっ！じゃない！学校こいよっ！」

「やだ」

彼女が口を尖らす。

「クラスどうなった」

「おま……じゃなくて美夏さんだけ違う組」

「えええ？！尚更やだ。ひとりとか」

なんか前よりわがままになった気がする・・・。

懲りない彼女。

「とりあえず、授業は受けるよ。受験生なんだよ？僕ら」

「それは大丈夫。勉強してるから」

さ、さすが優等生！！

「だから・・・ほつといてよ・・・」

だんだん小さくなっていく彼女の声。

「まだ引きずってんの？あのこと・・・」

あのこと・・・それは彼女の本性が皆にバレた事である。

「・・・どうでも良いじゃん」

口を尖らせる彼女。

「美夏ちゃん！ビールまだあ？」

家の中から聞こえる男性の声。

「はあい」

彼女の声が変わる。

出た、ブリッコ。

まだやってんのかよ。

いい加減、本性バラしたらいいのに。

「あれ？美夏ちゃん、どちら様？・・・もしかして彼氏かしら？」

「いや、あの・・・えつと・・・ちが・・・」

僕が彼女の顔色をうかがいながら答える。

「違いますよ！ありえない。こんな奴」

彼女と僕。

こんな奴う?!?!?!!

そりゃ彼女と僕は釣り合わないけど!・・・いろんな意味で。

なんか傷つくなあ・・・。

「じゃあ・・・?」

「クラスメイトです」

「そう。お名前は?」

「西山和也です」

「和也くんね」

にっこり笑う女の人。

「和也くんも食べない?いま、昼ご飯なの」

「え・・・でも、僕は・・・」

「若い子が遠慮しないの!ほら、あがつて」

僕の手を引く女の人。

強引だなあ、この女性ひと・・・。

「どうも・・・」

部屋には、顔を赤くした伯父さんらしき人がいた。

っていうことは、この女の人は伯母さんかな？

「はい、伯父さん」

彼女が、昼ご飯が乗ったちゃぶ台にビール瓶を置く。

そして、コップにビールを注いだ。

「すまないねえ」

女の人が、おひつに入った玄米を茶碗に盛りながら言った。

「いえ、そんな。無料で居候^{ただ}させてもらってるんだからこれくらいしないと」

「助かるわ。和也くん、たべてね」

「はい」と僕の前に茶碗を置く伯母さん。

「はあ・・・」

彼女の問い。

今、僕は彼女と山の中を散策をしている。

薄桃色だっただろう桜の木は、すっかり変わって、あちらこちらに緑色の葉が顔を出していた。

「あんたさ・・・」

彼女が口を開く。

「んー・・・？」

「翔子の事好き？」

「翔子？嫌いじゃねえけど？おもしれえし」

「そつか・・・」

彼女が目を伏せる。

「・・・じゃあ、わた・・・」

「美夏ちゃああん！！」

遠くから聞こえるおばさんの声が、彼女の声を遮った。

「晩ご飯手伝ってくれなあい？」

「はあい!」

彼女は、応えると僕に「ごめん」といって走って行ってしまった。

あいつはいったいなにを言おうとしてたんだろ・・・?

っていうか何で翔子?

僕はぽつんと立っていた。

証明。

結局、僕は何もできずに帰ることになった。

無念・・・。

どうやったら学校に来てくれるのだろうか？

どうやったら・・・。

どうしたらいいんだ？僕は。

何もできない・・・。

自分の無力さを知った夜だった。

「どうしたらいいと思う？」

僕一人では、到底思いつかなかった。なので翔子に問いかけてみた。

「さあ？」

「さあって・・・」

「ほっといたらいいんじゃない？」

「ほっとけねーよ、受験もあるのに」

「そんなにあいつが好きなワケ？」

「す、好き?!?!」

思いがけない翔子の言葉に戸惑う僕。

「いや、そんなに感情じゃなくて・・・っ!!」

「そんな感情でしょ？明らかに」

「ど、どこが?!」

「ダーリン、あいつのことばっか心配してるんだもん」

翔子が、ぷくうつと頬を膨らませる。

「そんなことっ」

・・・ないよ。

「じゃあさ、証明してよ」

「証明？」

翔子がにまあつと笑う。

うつ！

嫌な予感・・・。

「私と付き合って？」

「あ、ありえねえっつの！！」

「じゃあ、ダーリンがアイツを好きな事、皆にバラしちゃお！
おい、みなど・・・」

「あわわわ！ちよっ」

思わず翔子の口を塞ぐ。

ってか、これじゃ僕がアイツのこと好きみたいじゃん。

「じゃ、いい？」

「わかったよ！！」

やや、自暴自棄になりながら承諾した僕だった

わがまま姫。

あの日から、僕に不幸が次々と襲いかかった。

例えば、翔子が抱きついて来て失神しかけるし、皆には僕が彼女の事を好きだと誤解するし・・・。

やっぱ、つきあうとか軽々しく言うんじゃないかな。

「ダーリンッ！」

来た・・・。

「やっぱ、わかれようよ・・・」

「やーだ！私の初めての彼氏なんだからこんなに早く別れるなんて、ずええつたいやだ！ー！」

どうにかしてくれ・・・。

このわがまま姫を。

「ダーリンは私の事好き？嫌い？」

「嫌いじゃないけどさ・・・」

「じゃあ、いいよねっ」

翔子がにこつと笑う。

しまった・・・。

丸め込まれてしまった・・・。

「ほら。次、移動教室でしょ、早く行こ！」

茜色の教室。

放課後、日が西に傾きかけた頃。

僕は、国語の文法ワークを教室に忘れたのでとりにきていた。

遠くから、吹奏楽部の練習と野球部の掛け声が聞こえる。

僕は何気なく教室の扉を開ける。

ーガララ

よかった。

開いてたみたい。

日直、鍵を閉め忘れたのかな？

ま、いいや。

そんなこと。

僕が顔を上げる。

その向こうには、茜色に染まった机といすに座っている

彼女がいた。

こんな所にいるはずが・・・。

僕は「じし」と目をこすった。

「美夏・・・？」

眩くような声音だった。

そのせいか、彼女は気づいていない。

ただ、虚空を見つめていた。

茜色の教室。(後書き)

事実。

「美夏？」

今度は聞こえるように言うと、やっと彼女は我にかえた様だ。

「カズ・・・？」

彼女は、僕を見てゆっくり首を傾げる。

「うん。っていうかこんな時間になんでいんの？」

「まあ・・・」

彼女は、言葉を濁した。

「それよりさ、あれほんと？」

「あれって？」

彼女は、まっすぐ前を見たまま言った。

「翔子とつきあってる事」

「な、なんでっ、それっ！！」

情報いくの、はやすぎだろっ！

「まあ・・・ね？」

今度は僕が言葉を濁した。

彼女の彼氏。

「やっぱ、翔子の事好きなんじゃん・・・」

「や、でも・・・」

「私も彼氏作るしっ！じゃあね、お幸せに」

「へ・・・？」

彼女は、立ち上がってそそくさと教室に出た。

彼女に『彼氏』が出来たのは、その次の日だった。

「美夏ちゃん、来てるよ。めずらしいね」

ふと耳に入ったクラスメイトの談話。

「そっいえば、アノ子彼氏で来たらしいよ？」

えええ？！！

「よく、あんな子とつきあおうと思ったね、美夏ちゃんの彼氏。で、誰なの？」

僕は耳を澄まして次の言葉を待った。

「慶太郎くんだったさ」

け、慶太郎?!?!!

「あの、ファンクラブの子?」

「そうらしいよ」

「なるほどね、ゾッコンだったもんね」

テスト。

ええ?!

つてか早過ぎね?

顔に冷水をぶっかけられたような気分だった。

「ダーリン!」

翔子が抱きついて来たが、僕はそれも気づかず立ちつくしていた。

「ダーリン?」

「っ、ああ!翔子?なに?」

「ダーリン、今朝からずっとぼーっとしてる!そんなにショックだったわけ?」

「だ、だれがっ」

翔子も彼女と慶太郎がつきあった事知ってるんだ。

「中間テスト」

「へ?テスト?」

「うん、英語のテストさっき返されたでしょ」

うあつ、そのことかっ！

恥ずかしっ、彼女と慶太郎の話かと思った！

僕、意識しすぎだ・・・。

「そんなに悪かったわけ？」

「えっ！どうだっけ」

いつの間にか、机の中に入れてたテストを見てみると・・・

「げっ！！24点?!!!」

「うわ、ヤバくない？3年の成績は内申に入るんだよ？受験に響くよ、それ」

「ヤベエ・・・、どーしよ。っていうか、翔子はどうだったんだよ？」

「私？私はもちろん、36点!」

「うわ、頭悪いー」

「ダーリンは人の事言えないでしょ!」

「皆の衆！テストはどうだったかな？」

南藤が入り込んで来た。

皆の衆って二人しかいねえのに。

「僕、24点」

「私は36、南藤は？」

「僕は1点さ!!」

「「は??」」

そんなに威張って言える点数かつ!!

「皆の衆、僕ちゃんを目指し頑張りたまえ!!」

頑張れってどういう風に？

っていうか、もしかして・・・

「南藤、お前テストで一番いい点数は何だと思っ？」

「そりゃあ、1点に決まっているさ!!」

やっぱり!!

こいつ、何でも「1」がいいと思ってるんだ。

重症だな。

「ちなみに、成績もオール1だぞ!!」

「あ、そー」

「南藤、高校どうすんのよ？」

「この点数ならどこでもいけるが・・・」

「今のままじゃ、どこにもいけねえよっ！」

一位の座。

「ダーリン、順位発表見に行こ！」

順位発表とは、今回のテストの結果を中3の全員中1〜50番まで総合点で順位がつけられて

掲示板にそれを書いた紙を貼られることである。

ちなみに、1年の時からそこに僕と翔子はランクインしたことがない。

いわずもがな、彼女は、毎回1位だ。

翔子と廊下を歩いていると、掲示板に数十名、人が集まっているのが見えた。

なぜかその集まりは、どよめいていて皆同様に、驚いていた。

かすかに、声が聞こえた。

「軽山田、一位じゃないのかよ?!」

えええ?!

心の中で、驚きの声をあげる。

ありえない、彼女が一位じゃないなんて。

「めつずらしーっ！なんかあったのかな？？」

横からきこえる翔子ののんきな声。

で、誰が一位なんだろう？

僕の疑問はすぐに解けた。

「一位は、先間京華らしいぜ！」

phantom of beauty 　　く美しき幻影く

マズマキヨウカ？

聞き覚えの無い名前に首を捻る僕。

そんな子、いったけな？

「『phantom of beauty』かよ！転入したばつかなのにすげえな！」

ふぁんとむ　おぶ　びゅーてい？

「なんじゃそりゃ？」

「美しき幻影・・・」

「うをつ」

後ろから、つぶやくような声が聞こえた。

それにびっくりする僕。

そこには、切れ長の目に黒い長髪。

賢明そうで整った顔立ちの女の子が立っていた。

「だ、だれっ？！」

「先間京華・・・」

「君が?!」

「そう・・・」

先間はにこりともせずにつなずいた。

昼飯。

ーキンコーンカーンコーン

予鈴がなった。

「あ、もうすぐ昼休み終わりだ」

「え。まじでか」

昼飯食ってねえよ！

ちなみに、この中学の昼飯は給食ではなく各自が持ってくる弁当だ。

僕んちはお母さんもお父さんも料理が作れないため、

いつも、自分が登校途中にコンビニに寄ってパンを買う。

最初は面倒くさかったが、この頃は日課のようになってる。

僕は、いそいで教室まで行って、バッグを探った。

だが、みつからない。

「あれ、なんでだ・・・？」

僕は苛立ちながらバッグを探る。

「ない！」

「ダーリン、どしたの？」

「パンがねえ！」

「キーンコーンカーンコーン

」
「・・・」

おなかすいた・・・。

幻。

日が傾きかけた頃、僕は家路についていた。

さつきから、ひっきりなしにおなかが鳴る。

ん？

さつきむこうに彼女が見えたような・・・。

まさかな・・・。

おなかが減りすぎて幻覚みたのだろう。

やっぱり昼飯無しはきついな。

僕は自分の頬を二、三回たたいてまた家路を急いだ。

・・・どこからか彼女の笑い声が聞こえる。

僕は、辺りを見回した。

あ、あれか？！

彼女らしき髪の長い女の子を見つけた。

後ろを向いていて顔は分かんないけど。

「美夏っ！」

彼女らしき女の子の肩に手を置く。

振り返ると・・・

彼女じゃなかった。

「なに？」

「いや、人ちがいです。すみません・・・」

「もうっ！」

そういうと、彼女じゃない女の子はワンピースの裾をひるがえして歩き始めた。

「すみません・・・」

僕はもう一度女の子の背中に謝って

肩を落として家に帰った。

もうすぐ修学旅行。

「ねえ、ダーリン。もうすぐ修学旅行だね。楽しみっ」

「え？あ、そうなんだ。いつだっけ」

「『いつ？』って明日だよ？」

「マジで？！」

「え、知らなかったの〜？？」

「うん」

「何班とかおぼえてる？確かダーリンは私の班じゃなかったけど」

「おぼえてねえ、全く」

「先生に訊きに行ったほうがいいよ。あ、ほら田山先生来たよ」

僕は翔子に背中を押されながら、訊きに行った。

正直、修学旅行なんてどうでもいいんだけど・・・。

それなら、家で寝てたい・・・。

「あのお、先生」

ああああ、先生の顔が、あのデレデレの顔と二重に見える・・・。

「宮部先生とは上手くいつてますか？」

僕がそう言つとポーカーフェイスだった先生の顔が一瞬崩れた。

ちよつと、おもしれえな……。

「ん、まあな……。来月には結婚しようと思っている……。」

少し照れ気味に先生が言つた。

その表情で幸せが垣間見えた。

「おめでとつございます」

「訊きにきたのはそれだけか？」

「いえ、あの。僕って修学旅行の班、何班でしたっけね？」

「確か、西山は行動班は三班、就寝班は一班だ。行動班は千田、中山、里田と同じで、就寝班は高田、葉山、葛城とおなじだな」

大魔王参上！

「三班だったら我輩と同じだな！」

また、ややこしそうな新キャラが出てきたよ……。

「おお、千田」

千田明……超がつくほどの問題児である。
せんだめい

黙ってりゃ、ちょっとかわいい女の子なのになぁ……（泣）

「よろしく頼むぞ！我輩の足を引きずらぬようになー！」

「はぁ……」

僕はそう言っしかなかった。

「おら、もう席もどれ」

僕は席に戻って、ひそかにため息を付いた。

あんなヤツが同じ班だなんて……。

なんてツイてない……。

トラブル発生！

いよいよ、修学旅行当日である・・・。

僕は、けたたましくなる目覚まし時計を叩く様にしてとめて、むくつと起き上がった。

眠い・・・。

「なんで朝の六時に集合なんだよ・・・」

文句を言いつつ、クローゼットを開ける僕。

ハンガーにかけてあるのは、学生服と私服だけだった。

いつもならば、体操服もかかっているのに。

「あれ？体操服は？！」

僕は、クローゼット中をさがした。

やべえ！！！！もう集合時間だ！

「和也？どしたの？」

「体操服がないんだ！」

「体操服なら母さんが洗つといたよ？」

「え?!乾いてる、それ?!!」

「うっん。今洗ったばかりだから」

「はあああああ?!?!!ちよ、それで修学旅行に行かなきゃなんねえんだよ!」

「嘘っ、今から取り出してアイロンかけるからっ。和也はパンでも食べててっ!」

普段は洗濯とかなしくせに、なんでこんな時にっ!

僕がダイニングでパンを食べていると、父さんが新聞・・・ではなくは女の子のフィギュアを片手に話しかけて来た。

「和也よ!」

「ん?」

「これをもつて行くのだ」

渡したのは持っていたフィギュアだった。

「いらねえよ」

「いや、いる。おまもりだ。真凛ちゃんを父さんと思え!」

「思えるか!!」

「とりあえず、持っていくんだ!」

「ええゝ・・・」

「いいな?」

「もう・・・分かったよ・・・」

「できたわよ!」

母親が差し出したのは、半分湿っている状態の体操服だった、

「濡れてんじゃん」

「文句言わないの!それより、はやくしないと!」

「あ、うん」

僕は、湿ったままの体操服を着て家を出た。

ツいてない日。

「遅いぞ！西山」

先生に軽く説教されて、僕たちはバスに乗った。

あれ？だれだっけ、席が隣の奴。

「やあ！」

うわっ、朝っぱらからめんどくせえな・・・。

話しかけてきたのは、南藤好男だった。

「西山氏、よろしくな！」

よろしく？

「はあ？」

「バスの席、隣だろう？」

マジかよっ。

二時間こいつの隣にいるなんて・・・

「・・・今日はツいてない」

「何か言ったか？」

「いや」

席に座り二、三分経ったころ、南藤がうつむいて呟いた。

「吐きたい・・・」

「えええ?!?!」

最悪。

「僕たん・・・乗り物しやすいんだ・・・繊細な神経の持ち主だからね・・・」

最後の一言要らなくね？

っていうか、どこが？

心の中で、毒づきながら好男にビニール袋を渡して、先生^{たすけ}を呼ぼうとしたとき・・・

「おうえええええええ」

「うぎゃああああああああ」

なんと好男は、ビニール袋に吐かず、上を向いて吐いたのだ。

吐瀉物が噴水に様にわき上がる。

「なにやってんのっおおおお?!!!」

みんなもびっくり仰天して南藤をみる、そのあと顔をしかめた。

そして、先生が南藤にタオルを渡して床を拭き始めた。

僕は幸いながら席を立っていたため、何とか逃れたけど・・・

席が前後だった人には少しかかったそうだ・・・。

そのあと、南藤はバスから降りしてもらって服を着替え、へこみながらバスに乗った。

最悪。(後書き)

・・・はい、ということで今回は汚い話になってしまいました・・・。

すみません。

っていうか実はこれ実話です。

・・・いや、私が吐いたんじゃないですよ？

母が小学校の教師で、よく小1とかもつので

生徒(児童?)が吐いたりするのは日常茶飯事だそうです。

この話では、修学旅行中ですが、実話では教室の中で

噴水の様に吐いたらしいです。母の話では。

笑い話かどうかはよくわかりませんが、

どうせ吐くんなら変わった吐き方してほしいなと

思っ、て、書きました。

メンソーレ 沖縄。

あれから、いろいろあり、バスを降りて成田空港から那覇空港にいた。

あ、言っておくのを忘れたっけ？

一応言っておくが修学旅行の行き先は沖縄である。

『メンソーレ 沖縄』

という文字が僕らを迎えてくれた。

空港を出ると、むうんとした空気がまとわりつく。

沖縄だ。

沖縄に来た・・・。

「一旦、旅館に行って、荷物を置いてそれから行動班別にそれぞれ行動してください。まずは旅館行きますよ」

という先生の声。

このころの僕は中3の修学旅行が僕の人生を大きく変えることになるとは、知る由もなかった。

本当に好きな人。

「西山つてさ、翔子ちゃんときあつてんだろ?!」

葉山が身を乗り出して聞いて来た。

今は、午後十時。

先生に見つからないように恋バナ中。

え？男子なのに恋バナするのかつて？

そりゃあするさ。

枕投げとおなじくらい、もり上がるんだ

「まあ・・・な」

「いいよなあ・・・。俺、翔子ちゃん好みなんだ」

意気揚々と話す葉山。

「俺は、軽山田さんだなあ。あの笑顔が・・・!」

一人、妄想にふける葛城。

「僕は断然、先間さんだな。あのクールなところがたまらん!!先間さんなら虐められてもいい!」

頬を染めて語る高田に

「あはは、Mかよ！」と葉山がツッコんだ。

「翔子ちゃんとはどこまで行ったの?!」

「え?どこも」

「まじで?!つきあって結構あるだろ?!キスくらいしろよ」

「ええ?・・・うん・・・」

「もしかして手もつないでねえの?」

「うん」

「好きならそれくらいするだろー」

つまらなさそうに葛城が枕の上で頬杖をした。

「好き?」

僕が聞き返す。

「うん」

好き・・・。

僕は翔子の事を好きなのだろうか?

友だちとして好きだが恋人として・・・。

僕が好きなのは・・・

「ちょっと、ごめん!」

「え?! おいつ」

僕は三人の声も聞こえずに部屋を飛び出した。

言い訳。

部屋をでたのはいいものの、僕は彼女の部屋番号を知らなかった。

なんて、カッコ悪い・・・。

そのせいで、勢いがしゅるしゅるとしぼんでいくのがわかった。

はあ・・・。

僕はいつもこうなんだ。

肝心なところがダメっていうか・・・。

部屋番号を知らなかったら意味ないよね・・・と心のなかで呟いた。

僕は心のどこかでほっとしていた。

そんな僕にもつと嫌気がさした。

部屋番号がわからないなら、戻ってしおりを確かめたり、なんなりできるはずだ。

怖いんだ。

今更、なんなのよって。

あんたなんか嫌いって拒否されるのが。

だから言い訳をして自分から殻からに閉じこもる。

傷つけられるのが怖くて・・・。

何で僕はこんなにヘタレなんだろう？

彼女みかのことは好きだ。

抱きしめたい。

抱きしめたいのに・・・

僕の女だって

指さえ触れさせねえって。

他の男に彼女を取られたくない。

僕は、生まれて初めて自分が独占欲が強いことを知った。

生まれて初めて、彼女に対する恋心に素直になった。

虎穴に入らずんば虎子を得ず。

「西山君・・・」

頭を抱えていると、気配もないのに後ろから声が聞こえた。

振り返ると、Ｔシャツ姿の先間京華ますまきよつかがいた。

制服と雰囲気が違うが、やっぱり美人は何を着ても似合っていた。

「なんだ、先間か。どうしたんだよ」

「お風呂あがり・・・」

「何でこんな時間に・・・？」

「皆と入るのが嫌だから・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

長い沈黙が流れた。

「葛藤・・・・・・・・」

いきなり、先間が口を開いた。

「え？」

「葛藤してる・・・」

「先間が？」

「西山君が・・・」

な、なんでわかるんだっ！

そんなに僕、分かりやすいか？！

「虎穴に入らずんば虎子^{こじ}を得ず・・・」

「こけっ？」

「ことわざ・・・虎の住む穴（虎穴）に入るような危険を冒さなければ、
虎の子（虎子）のような貴重なものを得ることはできない、ということ・・・」

はうっ！

なんて適切なアドバイス！

「何で僕の悩みがっ？！」

「なんとなく・・・」

僕の問いに先間のそっけない返事。

なんとなくかよっ！！

とにかく、ゆっくりだけど勇気が湧いてきた・・・。

言いたい事。

「ねえ、先間さん。彼女の部屋番号知らない?!」

「502・・・」

「ありがとう」

僕はそういつて、別棟にむかった。

勢いよく、扉を開けたのはよかったが・・・

なんともぬけのから。

メンバー誰一人としていないのだ。

「あれえ・・・」

「カズ・・・?」

背後から、声が聞こえた。

聞き覚えのある声。

胸が苦しくなる程・・・聞きたかった声――。

「美夏・・・?」

振り向くと、丸い目をより丸くした美夏がいた。

「どこに行ってたんだよ・・・？」

ちがう、言いたいのはこのんじゃない。

「男子の部屋。つまんないからかえって来た」

本当に言いたいの・・・

「僕、美夏の事好きなんだ・・・。ずっと好きだった・・・」

「カズ・・・？」

告白。

「本当は自分でも分かってたけど、気のせいにしてた・・・好きなこと」

僕は、息を吸って言った。

「付き合って」

「私、もう付き合ってるから・・・」

「知ってる。けど、絶対そいつより僕の方が美夏の事・・・好きだ！」

「カズ・・・私・・・」

美夏が何か言おうとしたとき、足音が聞こえた。

先生だっ！

「こっち！」

美夏が僕の手を引っ張った。

その手は少し汗ばんで熱かった。

僕は布団に潜り込んで、美夏は寝た振りをした。

一応言っとくけど同じ布団で。

返事は明日。

確認をして来た先生は宮部先生だった。

「あらあ、軽山田さんだけ・・・？全員トイレかしらあ」

なんという天然・・・。

まあ助かった。

先生が扉を閉めた時、僕はふうつと息をついた。

宮部先生で助かった・・・。

もし、田山先生なら即刻バレていた所だろう。

「自分の部屋に帰って」

と冷たいお言葉。

「あのお、返事は？」

「明日するから。この私が修学旅行で男子と布団に、はいったなんてバレたら、私の株大暴落よ」

お前が入れたんだろうが！という言葉はあえて口にしなかった。

屋外での説明。

「これは、〳年の〳によって建てられ・・・」

一時間、この説明が続いている。

しかも、おくがい屋外で。

それに太陽がまるで、僕たちの頭を、焦がそうとしているかの様に、じりじり照りつけている。

日射病になりそうだ・・・。

暑い・・・。

すうっと汗が額を流れる。

それを手で拭う。

そんなことを、何回・・・いや、何十回も繰り返している。

まるで砂漠にいるかのような暑さだ。

あ、隣の隣の人が倒れた。

周りが風に吹かれた木々の様にざわめく。

ん？

なんか見たことあるような・・・。

目をこらしてみても・・・

あれ、彼女^{みか}じゃね？

近くにいた宮部先生と田山先生が急いで彼女の肩を抱いて、どこかへ連れて行った。

翔子の正体。

あれから、一日経っても美夏は戻って来なかった。

そして、話せないまま二ヵ月・・・。

中学校最後の夏休みが終わろうとしていたとき・・・。

くく

僕の携帯の着メロが鳴った。

電話だ。

・・・もしかして美夏？

僕の心臓は早鐘の様になったが、翔子からだった。

はぁ・・・と心の中でため息をつく。

でると、嬉しそうな翔子の声が聞こえた。

「カズ！」

「なんだよ・・・？」

「別荘行く、別荘!!」

「ベッソー？」

・・・べっそう・・・別荘？！！！！

「別荘って！お前持ってたの？！」

「持つてるより、親のだけど。軽井沢と北海道と京都とハワイとフランスに」

「お前んち、金持ち？」

「もちろん！山ノ内了って知らない？」

「あの山ノ内弁護士？行列のできる 相談所の！！」

「そう。それがパパ」

「ええええ？！！！！」

てつきり、翔子は普通の家庭の子だっと思ってた・・・！

旅行。

「・・・っていうかさ、何人で行くの？」

「んーとねえ・・・。雅でしょ、南藤でしょ・・・。」

マジかよ・・・あれといっしょにいったら面倒くさそう・・・。

「それで、京華ちゃんに、美夏ちゃんも誘おうかな」

「え、ええ?!!!」

「どしたの？」

「・・・いや、なんでもねえ」

あんな事言っただとに、恥ずかしすぎるっ。

「ね? いこつよ」

「でもなあ・・・」

「お願いっ」

「・・・」

「ね? 別荘の中は涼しいし、料理もおいしいよ?」

「なあ、自分が受験生だって分かってる・・・?」

「大丈夫だって 裏口入学すれば」

「う、裏口入学かよっ」

「だってさ、受験とか面倒くさくない？」

「でも将来困るぞ？」

「なんかなるって。つか、今が楽しければいいの。．．．ねえ、ダーリンはこの高校行くの？」

「まだ、きまってねえな」

「将来になりたいものとか、特にないし．．．特技とかもないしなあ．．．」

「そうなんだ」

「うん」

「．．．．．」

長い沈黙が続く。

「とにかく、行こつよ」

「．．．．．うん」

雨と格差。

そんなこんなで決まった旅行、

行き先は小学校の修学旅行で行ったことがあるから、僕はあんまり乗り気ではなかったが、

多数決で京都に決まった。

あのメンバーで行く先、ハプニングがないわけもなく・・・

「うわ、雨だぁ・・・」

みんなが集まって、さぁレッツゴーというときに、しとしと雨が。

「サイアクー」

翔子が、口を尖らす。

「ま、車乗って」

乗った車は、リムジン。

めっちゃ長い。

車内を見回して思ったこと、それは・・・

格差社会だ。

ってかすごすぎる。

なんじゃこれ。

なんで僕の周りにはこう・・・金持ちが多いのだろう？

美夏の様子。

車の中では、とにかくうるさかった。

南藤は自分の0点テストコレクションがどれだけあるか話しているし、雅は大阪のたこ焼きがどれほど旨いかを熱く語っていた。

仕舞いには、南藤が車酔いしたらしく「頭痛が痛い」なんて馬鹿まるだしなことを言っていた。

頭痛が痛いって……。

美夏はiPodをきき、翔子は楽しそうに僕に話しかけている。

僕は、翔子の話に時々相づちをうちながら、美夏の様子を盗み見た。

美夏はガムをかみながらiPod画面を見ていた。

なんかちょっと気まずい……。

持ってきたマンガを読むと、翔子はぶうつと頬を膨らませすねた振りをした。

到着！

「ついたよお！！」

すっかり寝ていた僕は、ハイテンションな翔子の声によって起こされた。

窓越しから外を見ると、ロジ的な木製の建物が見える。

あれが、翔子ん家の別荘だろうか。

周りは緑に覆われている。

ずっと寝ていたのだからないが、どこかの山の中だろうか？

外に出てみると、思わず深呼吸したくなるような爽やかな風が吹いている。

緑と緑の狭間からさしこむこもればは、僕の心を浮き足出させた。

あたりはミンミンゼミと鳥の大合唱である。

だが、いつものようにうるさいとは思わず、僕をよりわくわくさせた。

「うおお！」

先に別荘の中に入った雅が歓声を上げる。

雅に続いて僕が入る。

「すげえ！」

中を見て僕も思わず声を上げた。

たこ焼きづくり勝負、勃発！

中は外観より、綺麗で整頓されていた。

息を吸うと、木の匂いが鼻腔をくすぐった。

心地いい、そんな言葉が似合うような空間だった。

初めてとは感じさせない、むしろ懐かしさを覚えた。

「腹減ったなあ」

「そういえば、もう昼飯か。どうする？」

僕が周りを見渡しながら言った。

「昼ご飯食べようよぉ！」

翔子が提案した。

僕のなかである疑問が浮かび上がった。

「そういえばさ、弁当持ってきてったけ？」

「………あ」

全員の顔が蒼白になる。

いや、ちがう。

雅だけはふふんとなぜか、どや顔をしていた。

「そういうと思ったで！俺が食材持ってきたったから」

その言葉に皆、安堵の息を漏らした。

「たこやきの食材をな！今からたこ焼き作り勝負やあああああ！」

はああ？？？！！！

たこ焼き。

「どんなたこ焼きを作っても自由や！俺のたこ焼き魂が震えるくらい
のモンをつくってくれ！」

たこ焼きなんて作ったことねえよ。

つつーか、料理とかしたことねえよ！

「ダーリンはどんなたこ焼き作る？」

「ス、スタンダードで」

「つまんなくない？それ」

「そういう翔子は、どんなのにするんだよ？」

「私？私はね、闇鍋みたいにいるんなものいれてみようかな」

「先間は？」

「適当に」

適当って・・・。

「僕ちゃんはね」

割り込んできたのは南藤である。

「はいはい」

スイーツっぽいたこやき。

ムキヤー、ウキヤーと自分の扱いに反論する。

だが、ボギヤブラリーが少ないため、なんとも同じ言葉を繰り返す。

そんな南藤をほうっておいて・・・

「軽山田さんはどんなのつくんの？」

翔子が聞いた。

「私はスイーツっぽくしようかなって・・・」

彼女が控えめに微笑む。

「スイーツ？たこ焼きで？さすが、調理部の部長やな！」

「いえ、そんな・・・」

たこ焼きでスイーツ。

あまり想像はできないが・・・。

たこ焼きにチョコが入ってたりするのだろうか。

それより、翔子の闇鍋みたいなたこやきと、先間の「適当に・・・」
発言が今は一番怖い・・・。

救世主はバカだった。

「でさ、その材料とかは具とかはよういしてあんの？」

疑問に思つて雅に訊く。

小麦粉とか玉子とかは持っているのを見たけど・・・。

「わ、忘れとつた！」

ええええ?!?!

またもやハプニング・・・。

「大丈夫さ！」

そういつたのは南藤だった。

「僕ちゃんがじいやに頼んでおいてあげたさ！夕食もおやつもね！」

おお、意外なところに救世主^{メシア}がいた！

（つていうかじいやつて南藤の世話役か？）

少し南藤を見直し・・・

「まあ届くのは夕方だけだね！」

「はぁあああ?!!!!」

その後、南藤に非難の嵐だった。

じいや、サボる。

「お、おなかすいた」

夕方の五時頃、僕はテレビでやっているグルメ番組を見ながらそうつぶやいた。

「南藤、まだなの？食料は」

翔子がハリのない声で聞いた。

「もう届くはずだけど・・・」

と南藤も珍しく自信なさ気で。

「はあ～～」

みんなが一斉に力のない溜息をついた時だった。

「お待たせしました」

と背後から声がきこえた。

やっときた！

そう思って振り返ると・・・

「ええ?!」

美夏が素っ頓狂な声を上げる。

それもそのはず。

そこには、慶太郎がたっていたのだ。

両手にはパンパンに膨らんだ袋が握られている。

慶太郎がじいや？

南藤を横目で見ると驚いていた。

じゃあ、慶太郎はなんのために？

もしかして、美夏をおいかけて・・・？。

「どうしたの？！なんでこんなところに？！」

そう言つて美夏が慶太郎に駆け寄る。

むっとする僕。

美夏と僕以外のみんなはあっけに取られていた。

「な、なぜだ、じいやは？」

「じいや？ああ、あの人がじいやなのか・・・？」

ま、いいや。とにかくさ、美夏ん家行こうと思ってインターホン押そうとしたら漫画みたいな白くて長い老人に話しかけられてさ。これ届けてくれて」

美夏・・・ふうん。呼び捨てしてるんだ・・・。

嫉妬に狂う僕をよそに南藤は慶太郎に詰め寄った。

「じいや、どつか調子悪いのか?！」

「いや、ゴルフでいけないからって。ギヤラあげるからっていわれてさ。そんでなっがい車のせられて行き先もわからないまま、ここに来たわけ。つーことは臨時じいや?」

じいやあああああああ!!!

たこ焼きのハウ・トゥ。

「まあ、つくろっよ」

僕のその言葉でたこ焼き勝負の火蓋は切って落とされたのだった。

っていうか、たこ焼きの作り方分かんねえ……。

小麦粉とか入れればいいのか……？

そうだ、雅に訊いてみよう。

「雅、たこ焼きってどう作んの？」

「勘や！」

「勘かよっ！」

お前、行きの車でたこ焼きについて熱く語ってたんじゃないのかよっ！！

もう、いいや。

適当にやったら、作れるだろ……。

なんかかんやで作っていったが、ほんとにこれでイイのか？

出来上がったのは、真っ黒のたこ焼き。

焼き過ぎたかな。

味見してみると・・・

「お？えっ。なんじゃこりやあっ」

中が全然焼けてねえ。

サイアクの状態。

「お、できあがったんか」

雅が僕の肩越しに真っ黒のたこ焼きを見た。

「ってなんやこれ。ほんまにたこ焼きかつ？！」

雅の大きな声で皆がわらわら集まる。

「わゝヒドくない、これ？」

「味見してみ、南藤」

なぜか審査員の雅が南藤に真っ黒のたこ焼きを渡す。

持ち方っ！

汚い雑巾を持つときのような・・・。

つーか南藤、毒見役かよ。

気の毒に……。

「へ？なにこれ」

と、南藤が真っ黒のたこ焼きを口に入れた瞬間。

ポフン

と爆発音が聞こえ、南藤が顔を真っ赤にして倒れた。

「な、なにいれたんや。カズ」

やっぱりアレはまずかったか……。

辛味がある方がいいと思っただけど。

「タ、タバスコを少々……」

「タバスコおおお？！」

「南藤死んだな」

黄泉帰った南藤

「さあ、南藤^{バカ}はほつといてー」

いや、あれほつといていいのか？

白目剥いてるけど。

「次、翔子ちゃんいこうや」

「コレなんだけどー」

翔子が持つてきた皿のうえには・・・

なんじゃあれ？！丸くないけど。

翔子が作ったたこやきは、たこやきではなかった。

えっと、そうだな。

どちらかというとお好み焼きとかそういうカンジ。

「たこやきつてよくわかんなくてー、食べたことないしさあ」

「なんやて？！ほんまか！もったいないな」

「おいしいの？」

「あたりまえやんか！あの美味しさは神やで！」

暇で爪をいじっていると、だれかが足をつかんできた。

足元に眼をやると

「み、水をくれえ・・・」

げっそりと痩せた南藤が僕を見上げていた。

その姿はまるで、通りすがりの人食べ物乞う老人のようだ。

コップに水をくんで渡してやると、南藤はあっという間に飲み干した。

「・・・僕ちんさ、死んだばあちゃんに会ってきた」

・・・。

「それで、ばあちゃんにおまえはまだくるなって追い払われた・・・」

「・・・それ、やばくね？」

先間のたこやきは。

「ーで、次は先間か」

どんなたこやきが出てくるのか恐れおののいた僕だが先間のたこやきは普通だった。

・・・見た目だけは。

おなががすいた僕が安心してそのたこやきをつまむと

「うまいじゃん」

中に入っているのはタコじゃなかったけどおいしかった。

食べたことないけれど、なんか絶妙な味がした。

「ほんまや、うまいやん。何入れたん？」

「西山が食べたのはカナヘビの尻尾、北山が食べたのは女王アリ」

「うげええええ」

カナヘビの尻尾って・・・。

どこから拾ってきたんだ、そんなもん。

たこやき勝負のオワリ。

「美夏ちゃんのたこやきマジおいしーよお」

僕が水を飲み干していると、遠くから翔子の弾んだ声がした。

その言葉にみんながあつまる。

僕も、袖で口をぬぐってみんなのもとにいった。

「おいしーっ」

「うめえ」

歓喜の声があがる。

そんなにうまいのかと僕がたこやきをひとつつまむ。

そのたこやきは、見た目は焼き目は付いていなくて、コレ生焼きって言うオチじゃね？

とおもったが口にいれると、ほんわり甘かった。

一言でいうと美味しい。

中にはタコの代わりにレーズンやら胡桃くるみやらが入っている。

『ごはん』ではなく完璧に『スイーツ』だった。

対決の結果は文句なしに美夏である。

それでやっとたこやき勝負の幕^{まく}がおりた。

たこやき勝負のオワリ。(後書き)

やっとたこやき勝負書き終わりました。 - (; - 、 A) . . .

最初は書く予定はなかったのですが・・・思いつきで。

読者の皆様はたこやき勝負の背景が浮かんでこないかもしれないかもしれませんが、正直私も浮かばないです；；

すみません

— (, c | , 。 。 。 。 。 * . .

あと、言っておきたいことがあります。

たこやきの中身のことですが、カナヘビの尻尾と女王アリのことは保証しません。

というかおいしくないとおもいます。

もちろんタバスコも。

悪しからず。

でも、たぶんスイーツたこやきは美味しいと思いますよ。

たこ焼き粉とかじゃなくて、ホットケーキミックスでつくと美味しいんじゃないでしょうか。

不審者侵入？！

それから、満足したばかりは、臨時じいー慶太郎がもってきてくれた袋の中に入っていた柿ピーをつまみながらTVをみた。

もちろんビールは『こどもビール』である。

ガララと玄関の方から戸をあける音がした。

みんなが好奇心と恐怖の混じった目を音の聞こえた方に向ける。

「ダーリン、ちょっとみてきてよ」

「僕かよ」

しょうがねえな、と重い腰をあげて玄関の方に向かう。

リビングと玄関をつなぐ廊下は扉で遮られているだけだ。

皆の視線を背中に感じながらいざという時のために、こどもビールのビンを右手に持ち、左手でドアノブに手をかけた。

突然の訪問者

「慶太郎？」

玄関にいたのは、慶太郎・・・とあと一人がいた。

うつむいていて顔が見えない上に男でも女でもしているようなショートカットだから、性別がどちらか判断できない。

「と、誰？」

慶太郎は汗をぬぐって、答えた。

「大魔王」

「は?!」

大魔王と慶太郎に紹介された僕と同年くらいの少女が顔を上げた。先間とかと同じような系統というか、どこか神秘的な雰囲気を出している。

だが、そう思ったのはソイツが喋る前までだった。

「わっはっははは、我輩が大魔王である！」

いや、それ慶太郎から聞いたーじゃなくてっ！

何この、誰かさんと同じノリ。

っていうか同じクラスの千田明じゃん！

「何でこんなのつれてきたの」

ため息混じりに聞くと、慶太郎は苦笑いして答えた。

「いや、俺がさ、帰ろうとしたらここまで送ってくれた車がどっかいててさ、

しょうがない。自分で帰るかって歩いてたら、遭難しちゃって！。で、大魔王もさ、同じみたいだから。つれてきた」

「たく、何で僕の周りには面倒くさい奴が集まるんだ。

「ひさしぶりだな！我輩の夢は世界征服である！」

聞いてねえよ。ってか、世界征服って・・・。

世界征服。

「まあ、そんなこんなでよろしく」

「お名前は・・・」

美夏が訊く。

「千田明さ・・・」

「大魔王だ!」

「大魔王?! 面白い名前! よろしく」

そう言ったのは翔子だった。

翔子らしいな・・・。

「ああ、一緒に世界征服を目指そう!」

「おう」

「それなら僕ちんも加わるぜ! 金曜日を休みにする!」

はあ・・・バカが三人・・・

「じゃあ、俺も! 秋休みを作る!」

なんて雅も加わり、

「俺も！」

お前もか！慶太郎。

で、残りは美夏と先間と僕。

「私も・・・」

先間まで誘うなんて・・・すげえ！大魔王パワー！

「じゃあ、私も」

美夏まで・・・。

「おや！西山くん。世界征服に加わらないのかね？」

告白？

結局、入ってしまった・・・。

あれから、TVを見ながら、こどもビールで大宴会である

こどもビールなのに　なんでみんな酔ってんだよ！！

翔子は、TVに話しかけてるし。

南藤と慶太郎の会話は噛み合っていないし。

大魔王と雅はいつもどおりだし。

先間は、大笑いしてるし。

美夏にいたっては・・・いつもの翔子みたいなのだ！

コレが一番ありえねえ！

心臓が口から出そうである。

翔子にされても何も感じねえのに。

やっぱ僕、美夏の好きなのかな・・・？

「ちよつ、美夏！いい加減はなれろっ！」

「ええ、もうちよつとだけ」

そう言つて、僕の腕を話さない美夏。

・・・今なら告^いえる気がする・・・。

酔つてるし、それに酔いがさめても覚えてないよね・・・。

つばをのみこみ、手をぎゅっと握りしめた。

「・・・美夏」

「なあに？」

「・・・きだ」

「え？」

「好きだ」

じいやの失敗。

「　　つて、寝てるしっ！」

美夏は僕にもたれて寝息を立てていた。

即寝かよ。

ありがちなオチ・・・。

まあ、いいや。

ピロnpピロン

着信音になった。

僕のケータイか。

美夏を寝かせて、机の上においてあった携帯電話を取った。

受信ボックスには見たことのないメールアドレス。

メールをひらくと、すぐに送信者がわかった。

西山和也様へ

私は大変な失敗を犯しました。

あのこともビール、本物のビールでした。

すみません(*´、*)えへ

じいやあああ!!!

「(*´、*)えへ」じゃねえよ!

っていうかなんでじいやが僕のメルアド知ってんの?!

窓から見えた美夏。

そんなこんなで無事に（？）夏休みが終った。

8月より少しマシになった陽光が窓から差し込んでいる四時間目の社会（歴史）の授業。

社会の先生が黒板を埋め尽くすほど書いているのに関わらず、僕のノートは真っ白だった。

居眠りしているわけでも、ケータイを弄^{いじ}っているわけでもない。

ずっと美夏を見ていた。

ここ3・3の教室から運動場が見える。

どうやら3・5の女子は持久走をやっているようだった。

その中にもちろん美夏もいる。

彼女は顔を紅潮させて、後頭部でくくった長い髪を揺らしていた。

息遣いや熱がここまで伝わってきそうなほど、彼女は頑張っていて少し胸が詰まった。

「西山、きいところか、おい西山」

「あつ！はい」

「きいとらんかっただろ、立つとけ」

「はい・・・」

僕は席を立った。

気になって少し、窓を見る。

美夏は走り終えたところだった。

クラスメートと笑顔を交わしている。

「西山！」

「はい」

「よそ見すんな、今度よそ見たら出て行ってもらっぞ」

「はい・・・」

「じゃあ、今の大阪城を建てたのは誰か答えてもらおうか・・・そうだな。南藤」

たしか、豊臣秀吉・・・だよな。

安土城が織田信長で江戸城が徳川家康なはず。

「大工さん」

南藤は胸をはって手を腰に当てて自信あり気に答えた。

確かにそうだけれども！

「不正解」

南藤がブーブー言っていたけど、先生は無視して次の人を当てた。

「じゃあ、千田」

「我輩」

・・・論外だな。

「・・・じゃあ、西山、当たったら座ってもいいぞ」

「豊臣秀吉・・・？」

「不正解」

ええ？でも豊臣秀吉じゃ・・・。

「正解は、徳川家康だ。豊臣秀吉の建てたのは夏の陣で落城したんだ。覚えとけ」

この問題、美夏なら答えられたのかな。

結局、僕は美夏のことを考えていた。

僕の決心と翔子の涙。

四時間目の終了のチャイムがなると、教室にいた大勢の人が食堂へ向かうため出て行く。

「ダーリン」

翔子が僕の肩を叩く。

「どしたの？ぼーっとして、いつものことだけどさあ」

「ん？いや・・・なんもない」

翔子が二人分のお弁当を置いて、前の席を僕の方に向けて座った。

昼休みはこうして一緒に翔子の作ってくれた弁当を食べるのが日課になっている。

翔子は何となく料理ができなさそうなイメージだが（僕だけか？）

コレが意外と美味しい。

男の僕には物足りない気もするが、

タコさんウイナーとか前も言ったように両親が作れないので、嬉しい。

一応言っておこう。

両親が料理できなくて、僕も料理できないのに誰が料理つくるんだ？

って思う人もいるかも知れないけど、うちにはちゃんと、料理上手なおばあちゃんがいる。

「ダーリン、玉子焼き食べてみて！今日のは自信あるんだあ」

「え．．．うん」

翔子がアスパラガスのベーコン巻きを、ほおばりながら言った。

僕は今日、翔子にあることを言おうと決めていた。

「あのさ．．．」

「ん？」

「今日で一緒にお弁当食べるのやめよう．．．？」

「え．．．．．？それって．．．どどういう意味．．．？」

翔子の顔がひきつる。

「ごめん。別れよう．．．」

カランと翔子の箸が乾いた音を立てて床に落ちた。

慌てて拾う翔子。

その瞳にはうつすら涙が浮かんでいた。

心が血を流しそうだ・・・。

・・・翔子の顔を見れない。

僕のことを好きでいてくれて、お弁当も作ってくれたけど・・・。

「でも、関係を断つとかじゃなくて、友達に戻ろう・・・?」

翔子は涙も拭かずうつむいて、肩を震わせている。

「いいよ」

「・・・え?」

「ダーリン、美夏ちゃん好きなんですよ?」

顔を上げた、翔子が赤い目でニツと笑う。

「なぜそれをつ?!」

「バレバレだつつの!美夏ちゃん以外全員知ってるんじゃない?
美夏ちゃんも知ってるかも。ダーリン、分り易すぎだしっ!」

・・・恥ずかしすぎる。

「後悔しても知らないからね!」

「・・・うん」

「私、箸洗ってくるね!」

翔子はいつものように笑って教室を出ていった。

その昼休み中に、翔子が戻ってくることはなかった。

僕の決心と翔子の涙。（後書き）

この話（72話）の翔子の気持ちにぴったりの歌見つけましたw

奥華子さんの「あなたに好きと言われたい」

* 歌詞 *

追いかけて 追いかけても あなたの背中の端も見えない

一つだけ願えるのなら あなたに好きと言われたい

いつか笑っていつてくれたね あたしにはどんな事でも話せると

それがどれだけ残酷かを あなたは知るはずもないでしょう

会えなくなるくらいなら 自分の心に嘘をつくの

ずっと傍^{そば}にいたい 恋人じゃなくても

追いかけて 追いかけても あなたの背中の端も見えない

一度だけ嘘でもいいから あなたに好きと言われたい

もしもあの子になれるなら やっぱりあたしはそれを選ぶでしょう

人は守りたいものだけに 本当の嘘をつけるのかな

夜中の電話 急にゴメンネと いつもの声であなたはずるいね
傍にいられないなら 優しくしないで

もう二度と戻れないなら あなたを抱きしめられないなら

この声も この体も あの時 捨てれば良かった。

会いたい ただそれだけであたしを動かしているんです

会えない ただそのことが すべての心をまどわしてゆくのでしょう

追いかけて 追いかけても あなたの背中の端も見えない

もう二度とあなたの声であたしを呼ばなくてもいいから

一つだけ願えるのならあなたに好きと言われたい

早退と慶太郎。

「美・・・じゃなくて軽山田さんいないですか？」

それから放課後に、僕は3・5の教室を覗いて、一番扉に近い奴に話しかけた。

「午後から熱で早退してたけど・・・」

「まじで?!」

またかよ、大丈夫か・・・？

「ありがとう!」

僕はそう言い残して、走って学校を出た。

行く先は、勘の良い人じゃなくてもわかるとおもっ・・・たぶん。

美夏ん家だ。

息が切れて、足が鉛のように重くなった頃、美夏の家の前についていた。

緊張と疲労で震える指でチャイムを押す。

三十秒くらいして、二十代後半の女の人が出た。

多分お手伝いさんじゃないだろうか。

「どちら様でしょうか？」

「えっと、西山といいます。み、美夏さんのお見舞いに来たんですけど・・・」

「お嬢様なら、お友達と部屋におられますよ」

友達？

誰だろう？

門を開けて、美夏の部屋まで来た。

そういえば初めてか・・・。

あゝ・・・ドキドキしてきた！

ドアから話し声が聞こえる。

ここからだ、『声』ではなく『音』としか聞き取れない。

「お、おじゃまします」

扉を開けると美夏と向かいあわせて座っていたのは

「慶太郎?!」

慶太郎がこっちを振り向いて、目を見開く。

そして顔が『驚き』から『怒り』に変わった。

「何、お前は人の彼女の見舞いに来てんだよっ！」

僕の胸ぐらを掴む慶太郎。

その手は怒りで、わなわな震えている。

美夏は冷えピタを貼った額に汗を浮かばせながら、心配そうに僕と慶太郎を交互に見る。

「別に見舞いくらい、いいだろっ！」

僕も負けじと言い返した。

嫉妬。

「ふたりとも、もうやめて！」

美夏の鶴の一声で僕の口は閉じられた。

「いい加減にして。人の部屋でわーわーわーわー、うるさいったらありやしない！」

その美夏の言葉と鬼のような表情に口をあんぐり開ける慶太郎。

やっぱり、あいつ慶太郎の前でもぶりっこしてんのか。

美夏の本来の姿を知らない慶太郎に、少し　いや、かなり優越感ゆうえつかんを持ってしまう。

「出ていけよ」

慶太郎がボソッとつぶやくように言う。

「やだよ。・・・お前がでてけよ」

「なんでだよ」

美夏の目がキラリと光る。

うつ・・・。

くそっ！

僕は言おうとした言葉を飲み込んで、うつむいた。

「慶太郎、出てってくれる」

「えっ？」

彼女の予想外の言葉に目を見開く慶太郎。

ざまあみろ。

そんなことを思ってしまった。

どうかしてる、僕。

「話したいことあるの。西山くんと」

西山くん……。

カズじゃないんだ……。

二度目の告白とつねぼれ。

慶太郎が出ていくと、美夏が口を開いた。

「あのさ・・・」

「ちょっと待って」

僕が美夏の言葉を遮る。

「・・・なによ」

「その前に言いたいことがあるんだ」

僕の決心が揺るがないうちに、伝えておきたい・・・。

「・・・」

「早く言ってよ」

いらだちを隠せない美夏。

「・・・好き」

「はあ？」

僕の声は蚊のなく声のように小さかった。

あの夜よりもっと緊張する。

・・・ハンパじゃねえ。

「なんて言ったの」

「・・・好きって言ったんだよ!」

美夏は目を見開いて「なにいつてんだ、こいつ」的な目で僕をみる。

「意味分かんない」

「意味分かんないって・・・」

「要するになんなの」

え？

要するにって言いたいこと言っただけだ。

でも後ひとつ言いたいことがあった。

「付き合ってとか？」

「うっ・・・」

凶星。

「まあ・・・」

僕が煮え切らない返答をする。

「無理」

即答かいつ!!!

へこむわ・・・。

っていうかなんか美夏イライラしてる・・・いつもより。

「私と慶太郎は付き合ってるの」

「知ってるけど・・・」

・・・でも、別れて僕と付きあおうとか思わないのか・・・。

美夏と家族以外で一番近いと思ってたのは僕のうぬぼれだったのか。

ため息。

「・・・で、美夏の話ってなに？」

「なんもない」

なんだそれ。

「美夏はどの高校受けんの」

「関係ないでしょ」

「そりゃそうだけどさあ」

教えてくれてもいいじゃん。

「美夏は僕のことどうおもってる？」

思わず出てきた言葉だった。

後から自分の言った言葉に赤面する。

「・・・バカ」

「・・・」

それだけかよ。

「疲れた。出てって」

そういう美夏の顔は少し青白い。

「あ、ごめん。長居して」

「はやく」

いらだちを隠せない美夏の声が僕を急かす。

「じゃあ・・・」

扉を閉めた後、僕はあとため息をはいた。

「遅いよ、バカ」

と美夏がため息を吐いているのも知らずに。

南藤の恋患い。

「おい、カズ！南藤、なんかおかしいねん！」

僕に教室に入った僕に、北山が汗を垂れ流して慌てた風に南藤を指さした。

「へ？いつものことじゃない？」

「いつもより、やー！」

確かに。

顔は紅潮し、いかにもぼーっとしている。

僕は南藤に歩み寄って、声をかけた。

「おーい？大丈夫」

「どしたの？」

いつの間にか翔子が背後にいた。

いつものように抱きつかず、ただ僕の肩越しに南藤を見ているだけだが。

「なんか、南藤が変でさ」

「いつもじゃない？」

言う事同じだっ！

「たしかにねえ」

翔子が、南藤の顔を覗き込んでも、そのままニヤけている。

いつもの南藤にそんな事をしたなら、なんらかのリアクションをとるはずだ。

翔子が南藤の肩をゆらした。

「はっ！」

あ、気付いた。

「しょ、翔子様ああ？！」

驚きすぎだろ。

南藤は目を見開いて、そしてはつのわるそつに少しうつむいた。

子どもが親に嘘を付いたときのように。

「な、なに？」

「す、すみません！翔子様を一生愛すと誓ったのに……のに、他の娘を想っているなんてええ！」

まさか南藤に限ってそれはないと思うが・・・

こゝ 恋患^{わすひ}い？

南藤の恋。

その後、南藤は目から涙を流して謝っていた。

「他の娘？」

そんな南藤に少し引き気味の翔子が首を傾げる。

「ぐすつ。はい」

鼻水をすすりながら、今日起きたことを涙声で話し始めた。

「それは、朝の電車の中だったさ。　。

僕たんがあの子と出会ったのは。それはそれは、運命的な出会いだったさ！

まあ、ぼくたんほどのイケメンアースド優等生だから、モテるものも
しかたないんだけど」

ウザったい南藤の語りを省^{はぶ}いて、簡単に言っと

今日の朝、南藤を好きという女の子に出会ったという。

正直、その女の子を尊敬してしまった僕だった。

「で、告白されてどうなったんや？」

雅が口を挟んだ。

「いや、告白はされてないさ！」

「は？」

僕たちは呆然として南藤をみた。

「ただ、あまりにも僕の顔を見てたから、絶対に僕たんのこと好きさ！」

南藤のそのおめでたい脳に心底、呆れてしまった。

ストーカー南藤と大和撫子。

「で、どんな娘だったの？美人？」

翔子が好奇心を隠せずに身を乗り出す。

「よくぞ訊いてくれた！」

南藤がにやりと笑う。

「立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花とはよく言ったもの！」

お前テスト1点なのに、よくそんな言葉知ってるな！

「彼女こそ、本当の大和撫子やまとなでしこだろう！」

南藤が目をキラキラさせて語る。

なんか変な世界に入ってるぞ、南藤。

「そんなに綺麗やったんか！」

「それはそれは。言葉では言い表せないくらいにさ！」

とかいって、本当はそうじゃないとかいうそんなオチだろ。

作者の魂胆こんたん分かってんだよ。

「気になったので、あの娘とおんなじ駅に降りてみたのさ！ちなみに僕が降りる駅は2つ前なんだけどね！」

おい。

それ完璧ストーカーだろ。

翔子も雅も引いてるだろうが。

それでも南藤には関係ないようで、まだ熱く語っている。

「どうやら、ナデシコ女学院のようだ」

学校まで行ったんかい！

「記念に写真をとって見たからみるかい？待ち受け画像にしてあるのさー」

南藤がバッグから携帯をとって、ディスプレイをみて、またもや、にやりと笑う。

やばいよ、この人。

変態になりつつあるよ。

ってか変態だよ。

と心の中でつぶやきながら、ディスプレイを覗き込む僕。

翔子と雅も僕と同じようだ。

そこには、ナデシコ女学院の制服を着た美女がななめ横から映っていた。

絹のような黒髪に、アーモンド型の澄んだ瞳。

そして、形のよいふくらした唇にチラリと見える首筋。

「美人〜!!」

翔子と雅が驚きの声を上げる。

それを聞いて南藤の口角が上がる。

「そつだろつさ!」

「名前知らへんのか? また会えるって限らへんやろ」

「いいや。まためぐり会えるさ! 僕とあの娘は運命の赤い糸でつながってるからね。あと、彼女の名前は知らない」

.....。

「一言いい?」

たまらず僕が口を開いた。

「なんなのさ?」

「いっぺん、病院行け！頭の」

レッツゴー トゥ ア コンビニエンスストア！

眠れない……。

真夜中の一時ごろ、受験勉強もきりのいいところで終わり、
寝ようと布団にもぐり込んだものの

頭が冴えまくって眠るどころじゃない。

そっぴゃ、お風呂上りにカフェオレ飲んだんだけ。

このままじゃ、朝まで寝れる気がしねえ……。

そうだ。

コンビニに行くっつ。

コンビニのやけに明るい蛍光灯の光が、僕を迎え入れてくれる。

店員さんの眠そうなやる気のない声に軽くおじぎをして、

マンガが並んでいるコーナーに歩み寄る。

ん？

あの長い髪は

「美夏？」

美夏の瞳がこちらに向く。

「・・・カズ」

やべえ。

なにを話したらいいのかわかんねえ。

「エロ本見に来たわけ？」

「・・・へ？」

「変態っ！」

「ちよっ、ちがうって!!」

弁解しても、美夏は汚いものをみるような目付きで見る。

それでもやっぱり美夏は美夏で可愛かった。

離れていく美夏。

「私、アメリカ行くの」

突然見夏の口から出た言葉に、僕は「へ？」としかいづことができなかった。

「えっ、ちょ。旅行、だよね？」

静かに首を振る美夏。

「むこうの学校に留学すんの」

「うそ・・・」

一瞬、目の前が真っ白になった。

「こないだそれを言おうと思ったんだけど」

「・・・んで」

「え？」

「なんでそんなところに行くんだよ」

美夏が離れていく。

手の届かないところに。

「・・・翻訳家ほんやくかになりたいのよ」

「外国に行かなくなつて、勉強はできるだろ・・・？」

「怖くなつたの」

「え？」

「変わらない気がしたの、このままじゃ。悪い方へも良い方へにも」

南藤に春がきた。

「で、なんやねん」

僕と翔子と雅は、放課後に、南藤の家に集まっていた。

家というより、やかた館。

館というより、豪邸だった。

美夏の時と同じくらいの。

どうしてこう僕の周りにはお金持ちが多いかな。

類は友を呼ぶというけど（っていうか友なのか？）

僕の家はお金持ちなんかじゃないのに。

「皆の衆！きいて驚け！ついに！僕さんに春がきた！」

「てことは」

翔子が目を見開く。

「そうさ！僕さんに彼女ができたのさ！」

マジでか。

ナルシストバカ
南藤好男に先を越された・・・。

かなりショック・・・。

「で、今日集まったのは、皆の衆にいちはやく彼女を見てもらいたいからさ！」

南藤がコホンとわざとらしく軽く咳払いし、扉に目を遣った。

「では、登場なのさ！」

なんか、テレビ番組みたいだな。

扉がゆっくり開く。

黒髪と少し紅色に染まった色白の肌が遠慮がちにのぞく。

控え目にそこに佇^{たたず}んでいるのは、

紛れもないディスプレイにうつっていた大和撫子^{まぎ}だった。

「早川小毬^{はやかわ こまり}です」

早川さんがにこりと可愛らしく笑った。

南藤と早川さん。

「僕さんの赤いサファイア、小毬タンなのさ！」

それさつき聞いた。

あとタンって付けるのヤメロ。

それから、一番ツツコミたいのは

「赤いのはルビーだからな！サファイアは青」

そついうと南藤はぶいと目をそらした。

自分の非を認めろよ。

雅と翔子は早川さんと談笑している。

僕は、南藤と早川さんを見比べた。

このカップル、いつまでもつのかねえ。

それより、南藤に先を越されたのがなによりショック……。

「西山さん……ですよね、名前なんていうんですか？」

早川さんがにこりと天使のように僕に笑いかける。

「か、和也といいます」

あ、どもった。

やっぱり、かわいいなあ。

かえりみち。

「それじゃあね」

あのと、空が暗くなる頃に、僕らはそれぞれの家路についた。

僕が帰り道、何気なく本屋に寄り道していなかったら、早川さんの素顔を知ることができなかっただろう。

本屋の自動ドアが開くと、すこしひんやりした風が僕の頬を撫でた。

暦の上ではもう十月になろうというのに、まだ残暑が残っている。

このままじゃ、秋を越えてすぐに冬になりそうだ。

漫画の長い棚をを抜けると雑誌コーナーにはいる。

びっしりと人が集まっている。

奥のほうで見覚えのある制服がチラリと見えた。

もしかして

人と人のあいだをすり抜ける。

そこで見たものは

別人。

『ヲトメ倶楽部』を読んでニヤけてる早川さんだった。

『ヲトメ倶楽部』とは僕の母が愛読している雑誌だ。

「りん」や「じゃぶ」のようにいくつかマンガが載っている。

ただしBLの。
ボーイズラブ

僕の両親はずっと前に説明したが、覚えていない人に説明しておく。

僕の母はA系　つまり、オタクである。

ということは……

なぜ早川さんがそんな雑誌を読んでいるのか、僕の脳は必死に考えた。

でも答えは一つしかない。

早川さんが母と同類であることである。

認めたくはないが。

僕は今、眼の前にいる早川さんと大和撫子な早川さんはとても同じ人とは思いがたかった。

早川さんのトラウマ。

「あ」

『ヲトメ倶楽部』を読んでいた早川さんの目がこちらに向く。

あ、やべ。

慌てて目をそらす。

ていうかなんで僕が慌ててるんだ。

「また会いましたね・・・」

「あ、あははは」

・・・。。。

二人の間のぎこちない沈黙に最近よく聴く女性アイドルグループの歌が流れる。

何を話したらいい？

どんな顔をしたらいいんだ？

早川さんも同じ気持ちのようで、気まずそうに笑みをはりつけて

僕から目をそらす。

「・・・早川さん、もしかして・・・」

「その先は言わないでっ!」

早川さんの甲高い叫びに似た声で僕の言葉を遮る。

「あ・・・。ごめん」

早川さんがはつとした顔をして更に気まずそうにうつむいた。

「い、いや。気にしないで」

「その事、絶対南藤くんには言わないくれない・・・?」

「う、うん。でも、なんで?」

「トラウマなの・・・?」

トラウマ・・・?

モウダレモアイスコトハデキナイ。

「私、昔　中２の頃、好きな子がいたんです」

早川さんは静かに語りだした。

* * *

「ずっと好きだったのっ！付き合って」

「まじで？いいよ。実はオレ、早川さんのこと、気になってたんだよね」

その時は、あんなに辛い思いをするなんてしるよしもなかった。

運命だと思った。

クラス　いや学年でも女子に人気があるあの人と付き合えるなんて、しかも！！

あの人も私のことが気になってたなんてっ！

私は、有頂天で毎日学校へ通った。

あの人に会ったためだけに。

二人きりになると、『小毬』って優しく呼び捨てしてくれることも、

あの温かく大きな手で包んでくれることも

たまにする照れ隠しさえも。

彼の声で「好き」っていつてくれただけで、私はとろけそうだった。

その人の何もかもが好きで、愛おしかった。

この人と結婚してもいいなんて思ったほど。

帰り道、狭い路地でこっそり甘く、くちづけしたことも鮮明に憶えている。

私が彼を愛すように、彼も私のことを愛してくれていたと思う。

あの時まで。。

放課後、私の家で談笑をしていた。

私がお茶のおかわりを持ってこようとキッチンに行き、戻ってきたときのこと。

「小毬。なにこれ・・・？」

彼が、眉をひそめて先月号の『ヲトメ倶楽部』を私に見せる。

ベッドの下に隠していたのだが、もっと分かりにくいところに隠せば良かった・・・。

後悔した頃には遅かった。

中身を見ていないことを、心から願った。

「ま、マンガっ」

「・・・小毬ってオタクだったの？」

バレてしまった。

何よりも知られたくないことが、この人に。

「う、うん」

でも、私がオタクでもBL好きでも、私の事好きでいてくれるよね・・・？

「オレ、オタクって大っきらいなんだよね・・・。じんましんがでるほど」

「え・・・？」

「別れよう。オレの知ってた小毬はお前じゃない」

ワカレヨウ・・・？

あなたの知っていた私ってダレなの？

海に沈んでいく気分だった。

なにも聞こえない。

なにも感じない。

彼が出ていくと、私の目から大量の涙が溢れ出した。

もうダレモアイサナイ。

もうダレモアイスコトハデキナイ。

それから私は二次元の住人となった。

けど、人一倍臆病な私だから、外見だけは繕^{つくろ}って。

三次元の人間は怖い。

それに比べてマンガやアニメの二次元のキャラは私を裏切らない。

ずっと逃げないで永遠に私のそばにいる。

ずっと。

決意。

「それ以来男の子と話すのが怖くなって」

知らなかった。

早川さんがそんな思いをしてたなんて。

でも僕の口からは気のきいたことも出なかった。

「でもあの人ならなんか上手くやれる気がして　だから、絶対言わないでほしいのっ！」

早川さんが手に持っている『ヲトメ倶楽部』を皺しわができるくらい握る。

そんな思いで南藤と付き合ってたんだ・・・。

それなら

「うん。わかった。絶対言わないから」

「ほんとに?！」

早川さんの顔が一気に輝く。

「ありがとう！」

にっこり早川さんがほほえむ。

・・・でも、南藤となら付き合えるって思えるなんてやっぱりある意味尊敬する。

僕が女の子だったら南藤なら付き合いたくないと思うと思うけど・・・。

面倒臭そうで。

美夏も相当な物だけどさ。

見つかった？！

「あ、小毬タン！・・・と西山和也！」

うわ。

現れやがった。

噂をすれば、だな。

っていうか早川さん手に『ヲトメ倶楽部』もったままだし！

あ、慌てて後ろに隠した。

「やあ小毬タソ。また会ったね」

「そ、そうだねっ！」

「なんで二人が一緒なのさ？」

「ここであたり会ったんだよ、ね？」

早川さんが僕に同意を求める。

「う、うん」

「ありゃ、コレはなんのさ？」

いつの間にか早川さんの後ろに回っていた南藤が声を上げる。

うわ。

やべえ。

『ヲトメ倶楽部』 みつかるっ！

南藤はオタク？

「雑誌！」

早川さんがどんな雑誌か悟られないようにヲトメ倶楽部を抱きしめる。

「僕たん、それ読んだことあるのさ！」

え？

それどういう意味？

「・・・え？」

早川さんと僕の頭上でいくつかのハテナが巡回する。

「僕の姉^{ねえ}たんが『これがあたしのバイブル』って勧めてきたのさ！」

ね、姉たん？

南藤の『たん』付けはなんとかならんのか。

っていうかバイブルって何だ。

「ば、ばいぶる？なにそれ」

「僕たんにもわからないさ！けど『ヲトメ倶楽部』がおもしろいは確かさ！特に『恋の乱れ咲き』は最高だね！」

「そうだよねっ！・・・あっ」

早川さんが慌てて口を抑える。

「小毬たんもファンなのか？」

「う、うん」

「僕もさ！」

え？

南藤もオタクだったの？

オタク談議。

全くついていけない。

小一時間、二人でオタク談議をしている。

あのマンガどうか、このマンガはオススメとかまったくついていけない。

でも、なんとなく両親^{ふたり}の過去を見ているようだった。

この二人を両親のところに連れていけば、

仕舞いにはオタク同盟を結んでしまいそうだ。

「ぼ、僕もつかえていい？」

「いいや！西山たんも談議に付き合うのさ！全世界はオタクについて悪い印象を持ちすぎる！これは真剣に考えなければならぬ！！」

ついに僕も『たん』付けですか・・・。

格上げなのか格下げなのか。

っていうか、お前は自分の学力について考える。

本当、受験ヤバくねえか。

あと四、五ヶ月だぞ。

「だいたいオタクというだけで、その人のすべてが、分かるというわけじゃないのに、なんで敬遠されるんだ！」

そんなこと僕に言われても困る・・・。

「そうだそうだあ」

早川さん、相槌^{あいづち}打ってるし・・・。

っていうかいい加減帰らせてくれ。

美夏からの電話。

ようやく二人の呪縛じゆばくから逃れた僕は疲れきっていた。

なんなんだ、あの二人は。

ハンパねえ。

自分の部屋に入ると、ベッドに飛びつき、そのまま熟睡。

「カズうゝ、電話あ」

母が寝ている僕の肩を揺する。

「んあゝもうちょっと・・・あとじゅつぷ・・・ん・・・ZZZ」

「美夏ちゃんていう女の子から。声は真凜ちゃん並みに可愛いよ。でなくていいのね？」

「美夏!？」

一気に目が覚めた。

ものすごい辛いミントガム食べた時くらいに。

「でるのね？」

母がにやつと含み笑いする。

それを無視して受話器を取った。

「代わったけど・・・もしもし？美夏？」

「寝てたの？」

「まあね。ちよつと疲れてたから」

声と手が震える・・・。

美夏にはわかりませんように。

「それより、珍しいね。そっちから電話かけてくるなんて」

「・・・翔子ちゃんと別れたんだってね」

「よくしってんね」

「結構有名だよ。私のクラスでも」

「マジでか・・・勉強どう？はかどってる？」

「ぼちぼちね」

「そうなんだ」

会話がぶつんと途切れる。

何を話したらいいんだ　　！！？

「なにか用事があんの？」

美夏がこんな話をするがために電話するとは思えない。

「なんもないよ」

「本当に？」

「なんとなく・・・声が聴きたかったの・・・」

今なんて言っただ？『なんとなく』から聞き取れなかった。

「ゴメン。声が小さくて聞こえなかったんだけど」

「なんでもないっ！！」

「そう言われたら、なんか気になる」

「細かいこと気にするなっ！じゃ、今から英会話スクールあるから切る！」

「えっ。ちょっ」

プープープー・・・。

なんのためにあいつは電話してきたんだ？

僕は耳に受話器を当てたまま、首をかしげた。

WHY?

美夏から電話があつた次の日、僕はある噂を耳にした。

「ねえ、きいた？」

「え、なにになに？」

「軽山田さんと甕山くん、別れたんだって！」

「マジで〜!」

「マジマジ。三日前くらいにさ、軽山田さんがフットなんだってさあ」

どういふこと・・・？

それってもしかして昨日美夏が電話してきたのという意味があるのか？

女子たちはまだ喋っていたが何も聞こえなかった。

なんで？

どうして？

疑問が次々と浮かび上がる。

でも、美夏を目の前にしてそんなこと聞きにくい。

帰ったら電話して、美夏にきこつ。

緊張はピークに達していた。

「なにうなってるの？」

美夏の好きな人。

「け、慶太郎と別れたってホント？」

僕がそう聞くと、美夏の声が急に冷たくなった。

「そうだけど。それが何？」

「何って訊かれても・・・」

「用がないんならもう切るよ」

「ちよつ、待って」

「もう、なんなわけ？」

「なんで別れたの？」

これが僕が一番聞きたかったこと。

「・・・好きな人ができたの　っていうか、付き合う前からいたの」

それは誰なのか？

すごく気になったが、僕じゃないに決まってる。

だから聞くのが怖かったんだ。

「じゃあね」

「えっ」

プープープー・・・

僕は受話器を置いてしゃがみこんで、やるせなさのため息をついた。

のどかな昼休み。

「あれ、南藤は？」

それはのどかな昼休みのこと、僕はいつもより教室が静かなことに気付いた。

「さあ？あの彼女のどこちゃうん？」

雅が卵焼きを頬張りながら、興味無さ気に応える。

「うまくいつてんだ」

「意外にね」

翔子が横から口を挟んだ。

「最初はすぐ破局するって思ったけどなあ……」

雅がしみじみとつぶやいて窓の外へ視線を遣った。

「わいも彼女欲しいわ」

雅がちらりと翔子を見る。

翔子はそれを無視して、僕に質問を投げかけた。

「ダーリン……じゃなくてカズはどうなの？」

のどかな昼休み。（後書き）

久しぶりに更新しました…。

すっかり内容を忘れていたので、この96話を書くのに1話から読み直して、設定とか頭に入れてだいぶ苦労しましたが…
これからはちよつとずつ更新していこうと思います。

あとちよつとで終わるのでそれまで頑張ります 〃 〃 〃 川
・ ・ ・ 川

願い。

「…なにが？」

翔子の質問の意味がわからず、聞き返す。

「なにが？じゃなくて、美夏ちゃんのことよ！」

翔子が僕に詰め寄る。

「えっと…」

「美夏ちゃん、慶太郎さんと別れたんだってね。それってカズが関わってんの？」

「いや、それは別に…」

翔子のすごい剣幕に圧倒される僕。

「じゃあ、なんで?!」

「…好きな人がいる……っつて」

翔子はその途端、はっと息を飲んで黙りこんでうつむいた。

「告白は…？したの？」

「一応」

「一応？」

僕の答えに翔子が眉根を寄せる。

「でも、無理って」

「それって美夏ちゃんが付き合ってる時でしょ？」

「うん…」

頷く僕。

「もう一回告白してみたら？心が変わってるかも…」

「無駄だよ」

「……なんで？」

翔子がわけがわからないという様に僕を見る。

「だってアイツ…アメリカ行くし」

翔子が驚いたように一瞬、目を開く。

「んなの関係ないじゃん！カズは美夏ちゃんのが好きじゃないの？好きならそんなこと関係なくない？！」

「なんで、翔子がそんなに感情的になんだよ！」

翔子の声につられて僕の声もだんだん大きくなっていく。

「カズと美夏ちゃんが幸せになってもらいたいからに決まってるでしよっ…！」

そう言う翔子の目には溢れそうなほどの涙が溜まっていた。

その姿を見て、すこし冷静になる。

「……ごめん」

「…っ。幸せになってよ…お願い」

翔子は涙を流して僕にそう頼んだ。

僕はそれをただ見つめることしか出来なかった。

絡まった糸。

カズは美夏ちゃんのが好きじゃないの？

五時間目の授業中、僕はさっきの翔子の言葉を反芻^{はんすう}していた。

美夏のこととは…好きだよ。

色々あったけど、やっぱり今でも好きな事は変わらない。

ずっと一緒にいたいし、慶太郎と別れたって聞いたときはちょっと嬉しかったっていうか…なんかほっとした。

だからこそ、美夏にはアメリカに行って欲しくない。

けどアメリカに行っても行かなくても、美夏と僕が離れ離れになるのは必然といってもいい。

学力に差がありすぎるから、もし美夏が日本の高校へ行ったとしても、僕はその高校へ入学することはできないだろう。

けれど、美夏が日本にいてくれれば、道でバッタリと会えるかもしれないし、美夏にも会おうと思ったなら会える。

どうしたらいいんだ、僕は。

この想いをどうしたら……？

絡まった糸をほぐしているときのように、いらついて仕方がない。

……美夏に会いたい、今すぐ。

どうなるかわからないけど、どうなったっていい。

もう絶対自分の想いに、目をそらさない。

伝えたいこと。

五時間目のチャイムが鳴り終わると同時に、僕は立ち上がって教室を出た。

早く伝えたい　その思いだけが僕を突き動かす。

僕は人の間を縫って美夏のいる教室へ足を進めた。

すれ違う人の中で、一瞬だが美夏が見えた。

友達と思われる人と楽しそうに喋っている。

僕はごくりと唾を飲んで、美夏に近づいた。

「み、美夏！」

情けないほど声が震える。

立ってられないほど膝が笑う。

けど、やっぱり美夏が好きだから……

伝えたい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3164k/>

最強彼女

2011年11月20日02時12分発行